富山県福光町

# 梅原落戸遺跡群Ⅲ

1996年3月

福光町教育委員会

富山県福光町梅原落戸遺跡Ⅲ ——正誤表——

	<b>台山宗佃儿叫俩</b> 你份广 <b>起</b> 奶业 止於教				
頁	行	誤	E		
5	14	S E 01	S E 04		
6	21	5 • 12 • 15~17	5 • 15~17		
		12は須恵器杯	削除		
		15・19は	15・20は		
	23	21・27は	22・27は		
	24	24は	25は		
10	19	SK03 • 04 Ł	S K 03と		
	30	右岸	左岸		
12	31	206 ・ 307は	206 ・ 207は		
13	15	緑灰色しており	緑灰色をしており		
14	12	口傾部	·口縁部		
	22	76は	276 li		
15	18	(第19図・図版13)	(第24図・図版13)		
	20	(第19図・図版13)	(第24図・図版13)		
	28	洞部と	胴部と		
16	24	方計に	方形に		
18	17	珠洲の蓋	珠洲の甕		
	31	380 ・ 391は	380 ・ 381は		
21	8	110,000 m²	111,000 m²		
22	20	試掘調査では遺物に	試掘調査では遺構に		
36	36 S E 04 (6~11)		S E 04 (6~12)		



梅原落戸遺跡 7 地区全景



同上出土品

福光町の東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯でありますが、東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業(梅原地区)の実施に伴う梅原落戸 遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存することになりまし たが用排水路用地及び水田部分の一部について本調査を実施しました。

調査の結果、平安時代前期の竪穴住居跡や倉庫跡、平安時代末期の住 居跡や川跡が発見されるなど多くの成果がありました。

本書は、その調査結果をまとめたもので、出土品とあわせて郷土の歴 史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー 人材センター・富山県農林水産部・ほ場整備事業梅原地区委員会を始め、 地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝する ものであります。

平成8年3月

福光町教育委員会 教育長 吉江 正二

# 例 言

- 1 本書は、県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業(梅原地区)に伴う富山県福光町梅原落戸遺跡並びに梅原加賀坊遺跡、梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成7年6月19日から同年10月18日までである。梅原落戸遺跡4か所の調査面積はあわせて3,235㎡、梅原加賀坊遺跡の調査対象面積は23,400㎡、梅原胡摩堂遺跡の調査対象面積は87,600㎡である。
- 2 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
- 3 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長鳥越知証が調査事務を担当し、教育次長兼生涯学習 課長辻沢功が総括した。調査担当者は以下のとおりである。

梅原落戸遺跡(本調査) 富山県埋蔵文化財センター 主任 久々忠義

福光町教育委員会 文化財保護主事 佐藤聖子

梅原加賀坊遺跡、梅原胡摩堂遺跡(試掘調査)

富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 島田修一

同 池田恵子

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分担は各文末に記した。

- 4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。 池野正男・上野章・越前慶祐・往蔵久雄・片田良治・上村清・河合豊・岸本雅敏・神保孝造・太嶋勇・田矢一郎・ 中澤喜義・西井龍儀・橋本米次郎・林敏三・前田廣・溝口博文・宮田進一・桃野真晃・吉田敏信・金森淑子・西川 和美
- 5 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研 事業株式会社を用いた。

目 次

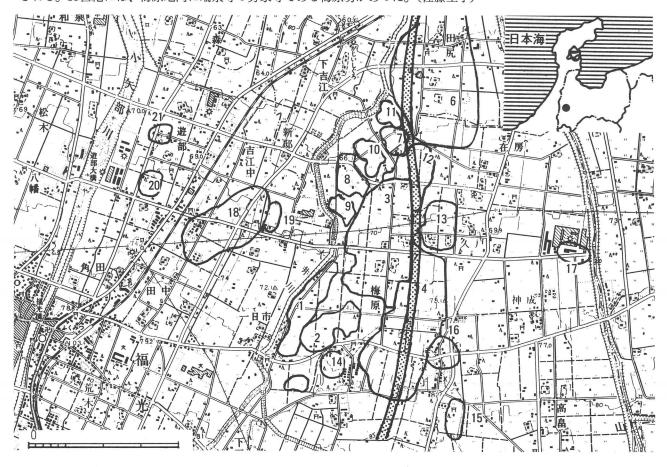
I	位置と環境1	$\mathbf{v}$	試掘調査の概要21
	第1図 位置と周辺の遺跡1		第7図 6・7・8地区の地形と区割23
П	調査のにいたる経過2		第8図 6地区の遺構25
	第1表 遺跡の概要2		第9図 6・8地区の遺構26
	第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置3		第10~16図 7地区の遺構27
Ш	調査の概要4		第17・18図 9地区の遺構34
	1. 調査の経過4		第19図 6地区の遺物36
	2. 調査の方法4		第20~23図 7地区の遺物37
	3. 6 地区の概要4		第24図 7・8地区の遺物41
	第3図 6地区の基本層序4		第25~27図 9 地区の遺物42
	4 7地区の概要7		第2表 試掘調査結果一覧45
	第4図 7地区の基本層序7		第28・29図 試掘調査位置と遺跡範囲46
	第5図 遺構配置図9		第30・31図 試掘調査の遺物49
	5 8 地区の概要15		図版 1 ~24
	6 9 地区の概要16		付図1 梅原落戸遺跡6地区
	第6図 9地区の基本層序16		付図2 梅原落戸遺跡7地区
付載	は 梅原落戸遺跡泥土の寄生虫分析19		付図3 梅原落戸遺跡8地区
IV	まとめ20		付図4 梅原落戸遺跡9地区
	参考文献20		

# I 位置と環境

梅原落戸遺跡は、富山県西砺波郡福光町梅原地内に所在する。福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部に位置する。県境には養老3年(719)、泰澄大師によって開山されたといわれる霊峰医王をはじめとするなだらかな山脈が連なる。南側に位置する上平村との境にある大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる礪波平野を形成している。

遺跡は、小矢部川の支流である大井川と山田川にはさまれた河岸段丘上に立地する。標高70m前後を測る当遺跡の周囲には梅原安丸・梅原出村・梅原胡摩堂・梅原上村・梅原加賀坊・久戸・田尻の各遺跡が密集している。(第1図) このうち、梅原安丸・梅原胡摩堂・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東北北陸自動車道を建設する際に発掘調査が行われ、12世紀中頃から17世紀にかけての大集落跡が発見された。この南側には、うずら山・宗守・竹林 I・竹林 II・東殿・徳成などの縄文時代を中心とした遺跡がある。また、梅原胡摩堂遺跡 6・7地区では弥生時代中期の出土品があり、梅原安丸III遺跡で古墳時代の竪穴住居跡を検出している[福光町教委1991・1994]。このようなことから、梅原落戸遺跡の周辺では、原始時代から今日まで連綿と人々が生活していたことがわかる。

文献史料では、古代には福光町の一部が砺波郡川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村とよばれ 官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定 される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家寺である梅原坊があった。(佐藤聖子)



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原出村Ⅲ遺跡 2. 梅原上村遺跡 3. 梅原落戸遺跡 4. 梅原胡摩堂遺跡 5. 梅原出村Ⅱ遺跡 6. 田尻遺跡 7. 梅原安丸遺跡 8. 梅原安丸Ⅱ遺跡 9. 梅原安丸Ⅲ遺跡 10. 梅原安丸Ⅳ遺跡 11. 梅原安丸Ⅴ遺跡 12. 梅原加賀 坊遺跡 13. 久戸遺跡 14. うずら山遺跡 15. 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡 16. 宗守遺跡 17. 久戸東遺跡 18. 仏道寺跡 19. 田中遺跡 20. 常楽寺跡 21. 遊部城跡

# Ⅱ 調査にいたる経過

平成元年(1989)、遺跡の所在する梅原地区において、21世紀に向けての新しい農業に対応するために「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業計画」が策定された。同事業は平成2~9年を事業年度とし梅原地区93haを対象とする計画であった。しかし、計画地内は、東海北陸自動車道の建設に伴う調査で梅原加賀坊遺跡などの存在が知られていたことから、計画地内への遺跡の広がりが想定された。そのため、教育委員会では、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて、平成元年度に計画地内の約20haの遺跡分布調査を実施した。その結果、広範囲に遺物が散布することがわかった。そこで、平成2年度には、遺跡の範囲や遺存状況を確認するため、国庫補助を受け試掘調査を行った。その結果、遺構の残りがよいことがわかり、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ね、遺跡の大半は盛り土を行うことで地下に保存し、一部の面工事・農道建設・用排水路部分については本調査を実施することとなった。残り73haについても、同年秋に分布調査を実施したところ広範囲に遺跡が広がることがわかり、平成3年度以降引き続き試掘調査と本調査を継続して実施している「町教委1991・1992・1993・1994・1995」。これまでの調査面積は次のとおりであり、遺跡の内容は第1表のとおりである。

平成 2 年度の調査 (試掘対象面積)約164,000㎡(本調査遺跡・面積)梅原安丸Ⅱ遺跡、梅原安丸Ⅲ遺跡、梅原安丸Ⅲ遺跡、梅原安丸Ⅵ遺跡の計2,186㎡。

平成3年度の調査 (試掘対象面積)約124,500㎡ (本調査遺跡・面積)梅原安丸遺跡、梅原安丸Ⅱ遺跡、梅原安丸Ⅲ遺跡の計5,238㎡。

平成4年度の調査 (試掘対象面積)約145,000㎡(本調査遺跡・面積)梅原上村遺跡、梅原出村Ⅱ遺跡、梅原出村Ⅲ遺跡の計4,700㎡。

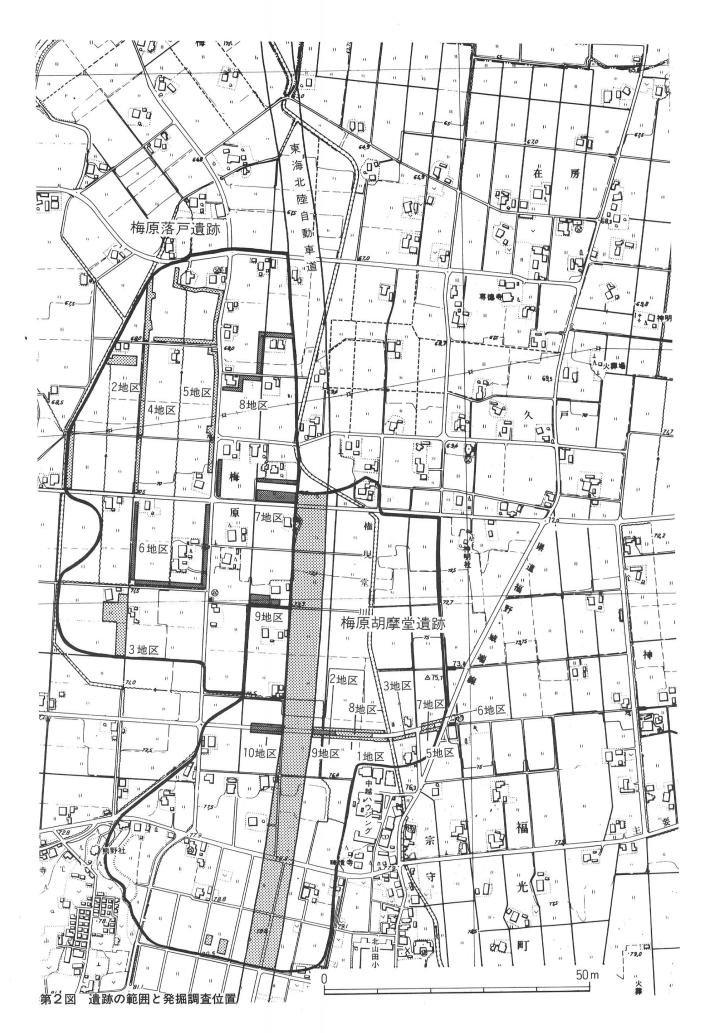
平成 5 年度の調査 (試掘対象面積)約116,000㎡(本調査遺跡・面積)梅原落戸遺跡、梅原出村Ⅲ遺跡、梅原上村 遺跡の計3,900㎡。

平成6年度の調査 試掘対象面積約130,000㎡ (本調査遺跡・面積)梅原落戸遺跡計3,450㎡

(久々忠義)

#### 第1表 遺跡の概要

No.	遺跡名	所 属 時 代	発見された遺構	発見された遺物
1	梅原安丸	縄文、中世、近世	掘立柱建物柱穴、穴、溝、竪穴状 遺構、井戸、池状遺構	土師質土器、珠洲焼、磁器、漆器、五輪塔、 石臼、下駄
2	梅原安丸Ⅱ 縄文(後期)、古代、中世、近世		掘立柱建物、同柱穴、溝、井戸、 土器溜まり	縄文土器・石器、須恵器、漆器碗、土師質土 器、珠洲焼、陶磁器
3	梅原安丸Ⅲ	縄文(後期)、古墳、古代、中世、 近世	竪穴住居跡(古墳)、掘立柱建物、 柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器・石器、須恵器、土師器、土師質土 器、珠洲焼、陶磁器
4	梅原安丸IV	縄文か、古代、中世、近世	掘立柱建物柱穴、穴、溝、竪穴状 遺構、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶 磁器
5	梅原安丸V 縄文か、古代、中世、近世		掘立柱建物、掘立柱建物柱穴、穴、 溝、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶 磁器、曲物底板
6	梅原出村Ⅱ 縄文 (晩期)、古代~中世		柱穴、穴、溝	縄文土器・石器、須恵器、土師質土器、珠洲 焼、銅貨、銅製キセル
7	梅原出村Ⅲ	旧石器、縄文(前・後・晩・中期 ?)、古墳~中世、近世、近代?	柱穴、穴、竪穴住居跡、溝、井戸、 遺物包含層(縄文・古代)	縄文土器·石器、須恵器(墨書土器)、土師器、土師質土器、珠洲焼、越前焼、陶磁器、銅貨
		縄文(前・中・後期) 古墳、古代 ~中世、近世、近代	穴、溝、井戸、遺物包含層(縄文)	縄文土器・石器、須恵器、土師器、土師質土 器、珠洲焼、土師質土器
0	梅原上村	縄文、古代~中世、近世	柱穴、穴、溝、遺物包含層(古代)	縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲焼、 越前焼、八尾焼?陶磁器、古銭
8		縄文 (中・後期)、古代~中世、 ・近世	穴、溝	縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲焼、 越前焼、石臼、陶磁器
9	梅原落戸	縄文(中・後・晩期)、弥生、古 代、中世、近世	川、穴、遺物包含層(縄文)、掘 立柱建物(含倉庫)土坑(古代) 掘立柱建物、道、土坑、溝(中世) 溝(近世~近代)、柱穴	縄文上器・石器、弥生土器、内黒土器(古墳)、 須恵器、土師器、土製品、鉄滓、馬應、炭化米、種子、 骨片、木製品(古代)、土師質土器、珠洲焼、越前焼、 瀬戸・美濃焼、輸入陶磁器、土製品、木製品、小柄、 鉄滓、銅貨(中世)陶磁器、鉄製品
10	梅原加賀坊	縄文、古代、中世、近世		縄文土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠 洲焼、磁器



#### 調査の概要 Ш

#### 1 調査の経過(第2・7図)

今回の調査は、平成5年度の協議に基づき、田面削平工事並びに用排水路付け替え工事に伴う本調査である。調査 遺跡は梅原落戸遺跡で、調査地点は4か所にわかれる。

遺跡は、当該工事に先立つ平成2年に行った分布調査で発見された。平成4~6年度に試掘調査を行い、その範囲 はこれまで梅原胡摩堂遺跡に含まれていた所を一部合わせて東西約430m南北約845m面積約279,000㎡となった。本 調査は、平成 5 年度に 2 か所( 1 地区・ 2 地区・計1,710㎡)、平成 6 年度に 3 か所 ( 3 ~ 5 地区 計2,450㎡) につ いて実施した。

これまでの調査では、縄文時代中期・後期・晩期、古墳時代、奈良時代、平安時代末~江戸時代の遺物が出土し、 それぞれの時期に人々の生活が行われていたことがわかった。とくに昨年の調査では、利波郡川上里と記した和銅3 年(710)の年号がある平城宮跡出土木簡が作られた時期に相当する奈良時代前半期の集落跡が発見され、川上の地 が梅原一帯であった可能性が高まった。

今回の調査地点は、平成6年度の本調査に続くので、6地区・7地区・8地区・9地区と呼ぶこととした。6地区 は、遺跡中央南寄りに位置し、用排水路付け替え工事にかかる675㎡を発掘した。 7 地区は遺跡中央東寄りで、田面 削平工事にかかる1,460㎡と用水路付け替え工事にかかる70㎡を発掘した。8地区は遺跡の北部に位置し、230㎡を発 掘した。9地区は遺跡の南部東寄りに位置し、800㎡を発掘した。

#### 2. 調査方法

調査は、まず重機により耕作土の掘削を行った。その後、地区ごとに基準杭の設置及び調査区割を行った。調査区 割は、調査区の形に応じておおむね南から北方向にX軸、西から東方向にY軸をとり、それぞれ2mを一区画として アラビア数字でその位置を示した。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリ及びヘリコプターにより 撮影した写真から図化した。

#### 3. 6地区の概要

かった。

#### (1) 地形と層序(第2・3図、図版1)

6地区は海抜69.8~71.5mで、地形は西方と北方へゆるく傾斜 しているが、おおむね平坦である。地表から黄色土の地山面(遺 構確認面)までの深さは30~80cmで、その間は大きく4層に分か れる。①層は現代の耕作土、②層は大正時代のほ場整備時の盛土、 ③層は灰黒色土で江戸時代の堆積と考えられる。④層は黒色土で 縄文時代から中世の遺物が含まれる。層の厚い所では、地山直上 で打製石斧がまとまって出土している(図版3の1)ことから、 ④層は時期的に分層できる可能性があるが、肉眼では識別できな 第3図 6地区の基本層序

① 層耕土 (現代) ② 層盛土 (明治・大正) ③ 層灰黒色土 (江戸) ④ 層黒色土(中世以前) ⑤ 層黄色土(地山)

#### (2) 遺構(第8·9図、図版1~4 付図1)

奈良・平安時代の井戸1・土坑2・溝3・柱穴4、中世の井戸1・土坑6・柱穴6・溝1などがある。また、地震

跡とみられる地割れがSE04付近で認められた。

#### A. 奈良·平安時代

#### 井戸SE04 (第8図、図版1・2)

SE04は、一辺約75㎝の方形で、底までは地山面から約1.2mの深さである。井戸は径約2.2mの大きな穴を掘り、中央に木の板を組み合わせた井筒を据え、その周りを埋め戻して造られている。埋め土は地山土にわずかに黒色土の混じった土であるのに対し、井戸内側の土は黒色土で、その境はほぼ垂直である。このことから、井戸が埋まる時にはその境には井筒の板があったが、のちに板が腐ってしまったものと考えられる。出土遺物は、奈良時代の土師器、須恵器、炭化米がある。

#### 土坑SK03·02·SE01(第8図、図版1·2)

SK03は井戸SE04のすぐ南にある。径1.2m深さ15cmの浅くて底が平坦なもの。暗渠排水路で分断されている。出土遺物は、奈良時代の須恵器・土師器があり、時期は8世紀後葉とみる。SK02とSE01からも土師器が出土したが、詳細な時期は不明。SE01は径55cm深さ40cmの穴で、発掘時井戸と判断したが、浅く井戸ではない。

#### 溝SD05 • 01 • 04 (第8図、図版3)

SD05はSE01の北方約 $30\,\mathrm{m}$ にある。幅 $40\,\mathrm{cm}$ 深さ $25\,\mathrm{cm}$ の断面V字形の溝である。出土遺物は須恵器があり、8世紀中葉とみる。流れの方向は北に対して13度東にかたむいている。井戸の向きはほぼ南北であり、古代の遺構群の配置に特に企画性は認められない。 $SD01 \cdot SD04$ からも 8世紀中葉とみられる土師器や須恵器が出土した。

#### 柱穴P3・5・7・8 (第8図、図版3)

P 3 は径50cm深さ30cmの小さい穴である。須恵器が出土したが時期は不明。 P 5 • 7 • 8 からも土師器や須恵器が出土したが時期不明。

#### B. 中世

#### 井戸SE03 (第8図、図版4)

SE03は、底径85cm深さ1.5mの円形の井戸である。底は平坦で、長さ10~25cmの石が敷いたようにあった。出土遺物は土師器皿があり、時期は13世紀とみる。

#### 土坑SK01・05~11 (第8・9図、図版2~4)

SK01は底の断面が波打っている。幅30cm深さ15cm長さ3mの溝が近接して並んだような土坑である。出土遺物は土師器皿があり、時期は14世紀とみる。

SK09は径1.2m深さ25cmで底は円錐形である。出土遺物は土師器皿があるが時期は不明。

SK05・06・10・11は、径 1 ~ 3 m深さ30~60cmで底が平坦である。覆土が地山黄色土粘土が撹はんされたような土であることから、粘土採掘用の土坑と考えられる。遺物はSK07から土師器皿と常滑甕が出土しており、時期は13世紀中葉とみる。SK08・09からも土師器皿が出土したが時期不明。

### 溝SD03 · 08 · 09 (第8図、図版3 · 4)

SD03は、幅1.8m深さ40cmで、ほぼ東西方向の溝である。出土遺物は土師器皿があるが時期不明。SD08・09は、幅20~30cm深さ5cmの溝である。出土遺物はないが覆土の状況などからここに含める。

#### 柱穴P1・2・4 (第8図、図版3)

径30~40㎝深さ30~50㎝のもの。間隔は等間隔でないので、同一建物の柱列にはならないかもしれない。遺物はP1から完形の土師器皿、P2から白磁と土師器皿が出土しており、13世紀とみる。P6・9・10からも土師器皿が出土したが時期不明。

#### **地割れSX01**(第8図、図版1・2)

幅20~40cm深さ60cmほどの溝が南北に走る。北側でこれに並行してひび割れが走る。地震に伴う地割れと考えられる。奈良時代のSE04、中世のSK09を断ち割っており、それ以降のものである。

#### (3)遺物 (第19図、図版13)

縄文時代後期前葉・後葉、奈良時代、平安時代、中世のものが整理箱(長さ65cm幅40cm深さ10cm、以下同じ)で12 箱ある。ほかに、江戸~明治時代のものが1箱ある。

#### A 縄文時代(第19図、図版13)

縄文土器・打製石斧がある。

**縄文土器**(1~3) 1は内湾する口縁部に押し引き沈線がある深鉢で、後期前葉(気屋式)である。2は内傾する口縁部に沈線が巡り、口縁端部が外反する深鉢で、後期後葉(本江広野新期)である。3は口唇部に沈線が巡る鉢で、後期後葉(本江広野新期)である。

**打製石斧** (4) 4 は、刃部が広く着柄部が細い逆T字型をしたもの。他は短冊型あるいは側辺が少しくびれる分銅型である。打製石斧は、3 本が重なって出土したところがある。(図版3 の1)

#### B 奈良·平安時代(第19図、図版13)

須恵器・土師器・炭化米がある。炭化米はSE04の覆土を水洗いして採集した。

SE04(6~12) 6 は胴部内外面刷毛目の土師器鉢、7 は土師器小型甕の底部、9 は土師器高杯の脚部、10は内面黒色の土師器高台杯、8・11は須恵器杯、12は須恵器高台杯である。11は底部と体部の境が角ばるもので、8 世紀後葉と考える。8~10は中葉の時期の可能性がある。

SK03 (13・14) 13は須恵器長頚壷、14は口縁端部が角ばる土師器甕である。時期は8世紀前葉または中葉と考える。

SD05 (18) 18は口縁端部が三角になる須恵器杯蓋である。時期は8世紀中葉とみる。

その他の遺構と包含層(5・12・15~17・19~24・26・27) 12は須恵器杯。15・19は底部と体部の境が丸い須恵器杯。時期は8世紀中葉とみる。16・17・26は口縁端部が三角になる土師器甕で、時期は8世紀末~9世紀前葉。20・22・23は口縁端部が三角の須恵器杯蓋で、時期は8世紀中葉。21・27は口縁端部が屈曲して端部が外へ出る須恵器杯蓋で時期は8世紀後葉。24は口縁端部がつぶれた感じの土師器甕で時期は8世紀後葉か。5は口縁部が角ばる土師器甕で時期は8世紀中葉。28は櫛書き波状文がある須恵器甕の頚部である。

#### C 中世

土師器皿、珠洲、常滑、青花、砥石があり、時期は12世紀から16世紀までのものがある。

SE03 (37) 37は口縁部をヨコナデする土師器皿(以下ヨコナデ土師器と呼ぶ)で、口縁部が内湾ぎみに立ち、時期は13世紀とみる。

SK01(38) 38はヨコナデ土師器皿。ナデ幅が広く端部が少し立ち、時期は13世紀とみる。

**SK07** (35・36) 35はヨコナデ土師器皿。ナデ幅が小さく、時期は12世紀後半~13世紀。36は常滑の甕とみられる。 口縁部縁帯が広いので、時期は13世紀中葉とみる。

P1~3(29~34) 29はP1から出土したヨコナデ土師器皿。口縁端部が少し立つので、時期は13世紀前半か。30~32はP2から出土したヨコナデ土師器皿。32は口縁部に煤が付着しており灯明皿である。30・31はナデ幅が広いので時期は13世紀後半とみる。33は口縁部が小さい玉縁の白磁椀で時期は12世紀。34はP3から出土したロクロ成形の土師器皿(以下ロクロ土師器と呼ぶ)。 外反する口縁部が薄く尖るので時期は15~16世紀とみる。

**包含層**(39~45) 39はヨコナデ土師器皿。40は珠洲叩き壷で、口縁部形態は珠洲第Ⅲ期(13世紀後半)の特徴 [吉岡1994]。39・40はいずれもSK07付近出土である。41~43は珠洲すり鉢、41・42は口縁部形態とおろし目の間隔から

珠洲第IV 2 期(14世紀前半)、43は口縁部がやや丸く膨らむ。一緒に青花皿が出土しており、時期は16世紀か。44・45は白磁。45は口縁部が外反するので、時期は15~16世紀とみる。

#### 4 7地区の概要

#### (1) 地形と層序(第2・4図)

7地区は、海抜約70.8mである。西側と北側に向かってゆるく傾斜する。調査の結果、調査区の東端は、13世紀までは川が流れていたことがわかった。この川は現在この東方約100mにある権現堂川のかつての流路あるいは分流であったと考えられる。

① 層耕土 (現代)② 層褐色土 (平安末~鎌倉)③ 層黒色土 (平安前・縄文)④ 層黄色土 (地山)

地表から地山面(黄色粘土層)までの深さは $40\sim60$ cmで、その 第4図 7地区の基本層序

間は大きく3層に分かれる。①層は現代の耕作土、②層は褐色土で平安末~中世の遺物が含まれる。③層は黒色土で、平安時代と縄文時代の遺物が含まれる。平安時代と縄文時代の堆積層は区別できないが、縄文時代の遺物は地山直山で認められる。なお、調査区西寄りで、②層と③層の間に黄褐色の砂層が堆積しているところがある。この砂層は9地区でも認められ、川の氾濫などで堆積したものと考えられる。また、調査区西側には、江戸~明治時代の屋敷跡があり、②・③層はその撹乱を受けているところがある。

#### (2) 遺構(第5・10~16図、図版5~9)

平安時代末~鎌倉時代の掘立柱建物 7・土坑 6・井戸 1・溝 2・川 2・集石 1、江戸時代末~明治時代の溝 (SD03・04・05・09)、土坑 (SK06・09~11)、井戸 (SK12~14) などがある。江戸末~明治時代の遺構については、説明を省略する。

#### **掘立柱建物**(第5·10~13図、図版3·4)

 $SB01\sim0600.7$  棟があり、川跡SD010のそばに集中し重なりがある。建物の棟方向はほぼ南北にあるが、真北に対して  $3\sim22$ 度の幅で変動がある。建物SB06は側柱建物であるが、その他は総柱建物である。なお、SD010の右岸に、 2.5 mの間隔をおいて並ぶ 3 つの柱穴がある。これは、東海北陸自動車の建設に先立つ発掘調査で発見されているSB06 の西側柱列にあたる可能性がある [富文振1994]。

#### SB01 (第10図上、図版8)

SD01に最も近い位置にあり、他の建物と重なりがない。東西 2 間( $4.8\,\mathrm{m}$ )×南北 3 間( $7\,\mathrm{m}$ )の南北棟の総柱建物とみられるが、南側は調査区外へのびる可能性がある。また、東北側にはほぼ建物の柱列と並行する柱穴があり、張り出しをもつかもしれない。棟方位は北に対して約10度東へ振れる。床面積は約33.6㎡で、建物群のなかでも小型である。柱間寸法は、桁行は $2.2+2.3+2.5\,\mathrm{m}$ 架行はともに $2.4\,\mathrm{m}$ で、桁行の柱間寸法が一定しない。また、西側柱列は、中央及び東柱列とはきれいに並ばず少し南へずれている。柱穴の掘方は $30\,\mathrm{cm}$ 前後の丸いもので、深さは $20\,\mathrm{w}$ 30cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは $10\,\mathrm{w}$ 15cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器があり、時期は $12\,\mathrm{w}$ 2世紀中頃とみる。 $1.2\,\mathrm{w}$ 4・5の中央には $1.2\,\mathrm{w}$ 3に対象とみられる。

#### SB02 (第11 • 12図 • 図版 7 )

 $SB03 \cdot 05$ と重なりがある。東西 4 間(9.1m)×南北 3 間(7.7m)の南北棟の総柱建物である。棟方向の長さが短いが調査区南側へのびるのかもしれない。棟方位は北に対して約 6 度東へ振れる。床面積は約70㎡である。柱間寸法は、梁行は2.0+2.4+2.5+2.2mで、桁行は $2.3\sim2.6+2.8+2.5\sim2.8+2.6$ mである。梁行は外側の柱間が狭い。桁行の柱間寸法は一定でない。

柱穴の掘方は30~40cmの丸いもので、深さは20~50cmで、西側と東側柱列の柱穴は深い。柱は残っていないが、柱

穴の土層の違いから柱の太さは $10\sim15$ cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器・白磁・鉄滓があり、時期は12世紀後葉とみる。

#### SB03 • 05 (第11 • 12図、図版7)

SB03とSB05は柱穴の大きさが異なることから別々の建物と考えられるが、SB03の建物の南側中央の柱穴がないこと、接続部分にSK01・02があることなどから、SB03はSB05に接続して建てられた建物と考える。SB02とは重なりがある。SB05は、建物の主体が調査区外にあるらしく、北側柱列だけである。梁行に相当するとみられる東西 4 間 (9.4 m) があり、柱間寸法は、 $2.3\sim2.4$ m である。柱穴は、径50 $\sim70$ cm深さ40 $\sim60$ cmの大型である。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは20 $\sim25$ cmほどであったと考えられる。出土遺物は土師器があり、時期は12世紀中葉とみる。

SB03は南側の棟持柱に相当する柱穴がない。そのため、SB03P3を南側の棟持柱として共有して、SB05の北側へ接続して建てられたのであろう。そうであれば、SB03は東西 4 間(9.5 m)×南北 5 間(12.1 m)の南北棟の総柱建物である。棟方位は北に対して約 6 度東へ振れる。床面積は約114.95 ㎡である。柱間寸法は、梁行桁行とも2.3~2.5 mである。

柱穴の掘方は30~50cmの丸いもので、深さは20~40cmである。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは15cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器皿・製塩土器があり、時期は12世紀中葉とみる。

#### SB06 (第10図下、図版5)

SB03・04と重なりがある。東西2間(4.7m)×南北3間か(7.5m以上)の南北棟の側柱建物である。棟方位は北に対して約8度東へ振れる。床面積は約35.25㎡以上である。柱間寸法は、梁行2.35m桁行2.5~2.7mである。

柱穴の掘方は $30\sim50$ cmの丸いもので、深さは $20\sim50$ cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは $10\sim15$ cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器・製塩土器・鉄滓があり、時期は12世紀後葉とみる。 P7に接し南から土師器皿が5枚まとまって出土した。

#### SB04 (第13図、図版 5)

 $SB03 \cdot 06$ と重なりがある。東西 4 間(9.5m)×南北 3 間か(7.7mか)の南北棟の総柱建物である。棟方位は北に対して約 5 度東へ振れる。床面積は約73.15㎡ほどであろう。柱間寸法は、梁行は $2.2 \sim 2.5$ m桁行は $2.5 \sim 2.7$ mである。柱穴の掘方は $42.5 \sim 2.5$ mの丸いもので、深さは $15 \sim 50$ cmである。柱は残っていないが柱穴の大きさから $10 \sim 15$ cmほどであったと考えられる。

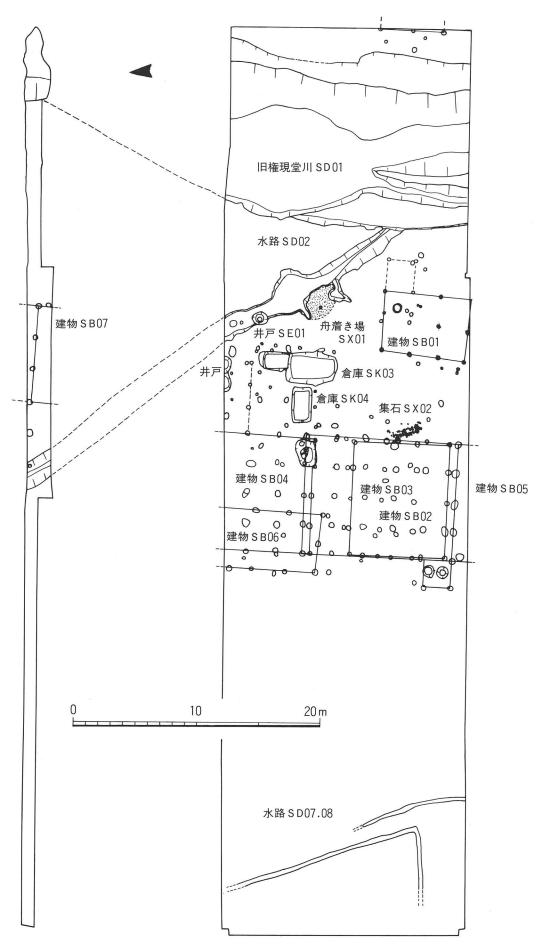
この建物の南東角に土坑SK05がある。その南側の柱穴は建物南側の柱列の並びから少し南へはずれており、SK05がこの建物に付属していた可能性が高い。出土遺物は、土師器・白磁があり、時期は12世紀中頃とみる。

#### SB07 (第13図、図版 9 • 10)

SB01~06建物群の北方約20mのところにある。用水路付け替え部分の調査で発見されたもので、東西方向の柱列3間分(7.9m)である。柱間寸法は2.6~2.7mである。SB02・04の桁行寸法に近いことから、東西棟の総柱建物と考えられる。棟方位は北に対して約10度東へ振れる。柱穴の掘方は約40cmの丸いもので、深さはP1が25cmと浅いが他は50~60cmで深い。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは20cmほどであったと推定できる。出土遺物はないので時期は不明である。遺物がないことや建物の方向がSB01と同じことから12世紀中頃の可能性が高い。土坑(第11・13・14図、図版7~9)

#### SK01・02 (第11図、図版7・9)

SB03の西側で、SB05と接続するところにある。SB03と05とが接続する建物であることは、これがあることでも推 測できる。05の西側に接してある。柱穴が伴うことから、建物から張り出す上屋が架かっていたと考えられる。いず



第5図 平安時代末期の遺構配置図 (約1/300)

れも上部径90cm底部径40cm深さ35cmで、約20cmの間をおいて並んでいる。覆土は、黒褐色の粘質土であるが、下層は 黄色粘土のブロックが混じる。遺物は、SK01から土師器・常滑または越前、SK02から土師器が出土しており、12世 紀中頃とみる。

遺構の性格は、土坑が二つ並ぶことから、便所ではないかと考えられた。そこで、覆土を、富山医科薬科大学の上 村清助教授に寄生虫の有無を調査していただいた。その結果は別稿のとおりである(付載)。

#### SK07 (第10図)

SB01のP1・2・4・5で囲まれた一画の中央に位置することから、建物に付属するものと考えられる。径約70㎝底径 40㎝深さ20ء。覆土は黒褐色土である。SK01・02と形態が似ている。出土遺物は、土師器・常滑または越前があり、時期は13世紀前葉とみる。

#### SK03 • 04 (第14図 • 図版 8)

X6~9Y23・24区にある南北の長さ6.4mの方形の土坑。北側と南側では幅と深さが異なり北側は上幅1.45m底下幅 1.1m深さ20cm。南側は上幅2.6m底幅1.8m深さ40cm。上屋が架かっていたと考えられる。東側辺に柱穴状の穴が並ぶが、その柱間は不揃いで相対する柱穴もないので、上屋建物の柱穴であるかは不明。覆土はいずれも黄褐色または黒褐色であるが、覆土の堆積状況をみると重なりがあるらしい。その場合南側の深いところが時期的に新しい。南側の底には川原石が点在する。出土遺物は土師器・珠洲・瀬戸・青磁・白磁・硯・製塩土器・鉄滓があり、時期は13世紀前半とみる。

SK04は、SK03の西に接する長さ(東西)2.75m幅(南北)1.55m深さ35㎝の方形の土坑である。底面は平坦で長さ2.3m幅1.2m。上屋が架かっていたと思われるが、北側南側に柱穴状の穴があり、上屋建物の柱穴であるかもしれない。覆土は黒褐色土で、SK03・04と似ている。出土遺物は土師器・褐釉陶器があり、12世紀後半とみる。

#### SK05 (第13図、図版8)

SK04の西側、SB04の南東隅に位置する。長さ(東西) 2 m幅(南北) 1.5m深さ50cmの方形の土坑。底は長さ1.5m幅90cmで東側はさらに20cmほど深いところがある。そのなかに、焼けた河原石がまとまって入っていた。SB04に伴う炊事場のような場所であるかもしれない。覆土は黒褐色土で、SK04・05と似ている。出土遺物は、土師器・白磁があり、時期は12世紀後半とみる。

#### 井戸SE01 (第15図、図版8)

川SD02と重なってあり、川が埋まった後につくられた井戸。上部径約1m底径75㎝深さ約1mで、底部中央に径30㎝深さ約20㎝の円形の掘り込みがある。覆土は黒褐色土で、途中に10~20㎝大の河原石がまとまって入っていた。この石は、井戸枠の一部として使われていたものかもしれない。出土遺物は土師器があり、時期は13世紀前半とみる。川SD02・舟着き場SX01(第15図、図版9)

SD02は川SD01の右岸から出て西北方向へ流れる川。検出面での川幅は1.5mであるが、当時の川幅は約3mである。 川の断面はV字形で、覆土は上層が灰褐色砂質土、下層が褐色砂礫土である。砂礫土は水の流れが強かったことを物 語る。出土遺物は、土師器・白磁椀があり、時期は12世紀とみる。

SX01は、SD01から約10m入ったところである。SD02の左岸に褐色の細かい砂を敷き詰めている。砂は2.5m四方に約10cmの厚さで盛られており、硬く締まっている。盛り砂の両側は溝で区画され、川の岸辺と境をつけている。盛り砂の上面はSD01側にゆるく傾斜している。盛り砂は川へ下りる際に滑らない工夫であろう。川はその部分では川底が平坦になっている。水の流れを緩やかにする工夫であろう。この場所の西側には倉庫と考えられるSK03・04もある。このようなことから、ここは、舟を係留し荷物の上げおろしをする舟着き場と考える。SD02は13世紀には埋まっているので、舟着き場の時期は12世紀である。

#### 川SD01 (第16図、図版8)

川幅約10m深さ1.5mの自然河川とみられる。この川は、東海北陸自動車道敷地の発掘調査で発見されているSD701とつながる[富文振1994]。川は、南東方向から流れてきて、この場所で北へ流れを変え、現在の権現堂川にほぼ合流する。現在の権現堂川は、ここから約100m東に流れているが、かつてはここを流れていたかその分流があったと考えられる。覆土は、上層が灰黒(褐)色土、下層は黄褐色砂礫土である。上層からは近世陶磁器が出土し、下層からは土師器・珠洲・常滑または越前・白磁が出土した。川は13世紀前半まで流れていたようであるが、それ以降は水の流れはなく、江戸時代には水田となっていたらしい。

#### **集石遺構SX02**(第16図、図版7・9)

SB02・03の東に接するところにある。SB03の東側柱列の柱穴を覆うので、SB03建物より新しい遺構と考えられる。 一辺 5~40㎝大の河原石が長さ約 5 m幅1.5mの範囲にほぼ水平に集まっている。石の位置は地山面から30~40㎝浮いた状態である。この高さは当時の地表面にあたるのであろう。

この集石の下を地山面まで掘り下げたところ、もう一群の集石があった。この集石は、 $5 \sim 10 \, \mathrm{cm}$ の小さい河原石を長さ(南北) $1.7 \, \mathrm{m}$ 幅(東西) $60 \, \mathrm{cm}$ の範囲にほぼ水平に集まっている。集石の下は深さ $10 \, \mathrm{cm}$ ほどの浅い穴になっており、南端には径 $50 \, \mathrm{cm}$ 深さ $70 \, \mathrm{cm}$ の深い穴がある。上の集石と下の集石との間に、白磁の完形に近い椀があった。

上の集石の石は焼けているものが多い。炭や焼け土も混じっており、ここで火を使う作業が行われたことがわかる。また、石に混じって、土師器・白磁・瀬戸・製塩土器・鉄滓・フイゴの羽口が出土した。このようなことから、ここでは、製塩土器があるので製塩(焼き塩)作業が、鉄滓・フイゴの羽口があることから製鉄(小鍛治)作業が行われたことが想定される。下の集石は焼けておらず、遺物も含まれていない。上の集石で行われる作業のための除湿を目的としたものであろうか。

この遺構で注目されることに、白磁が多いことがあげられる。白磁は集石の周辺出土のものを含めると23点以上で、皿・椀・花瓶・小壷などの種類がある。破片が多く、意図的に打ち欠いたものもある。土師質小皿には底部穿孔のものがある。そのようなことから、白磁は、製塩作業や製鉄作業にあたって祭祀がおこなわれ、その際に用いられたことが考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から12世紀後半とみる。

#### 溝SD07 · 08 (第15図、図版 6)

建物群の西方約20mのところにある。その間には江戸末~明治時代の遺構があるが、建物群と同時期の遺構は全くみられない。溝はいずれも幅30cm深さ30cmほどで、南から北へ西寄りに走る。SD08は途中で西へ屈曲している。覆土は褐色土で、基本土層の②層とよく似ている。溝のあたりの②層は酸化鉄分が多く含まれており、湿地であったことを思わせる。出土遺物は土師器があるが、詳細な時期不明である。

#### (3)遺物 (第20~24図、図版第14~16)

縄文時代中期・後期、奈良時代末~平安時代初期、平安時代末~鎌倉時代前期、南北朝~室町時代のものが整理箱で約48箱ある。ほかに、江戸時代末~明治時代の陶磁器などが約14箱出土した。

#### A. 縄文時代(第20図、図版14)

縄文土器(46~51)・磨製石斧(52)・打製石斧(図版14)がある。

46は隆起線と半隆隆起線による曲線文様がある深鉢で、時期は中期中葉(古府式)。47は凹線文がある深鉢で、時期は後期後葉(井口式)。48は沈線文がある鉢で、時期は後期末(本江広野新期)。49は斜縄文の深鉢。50は口縁部内側にとぎれとぎれの沈線が巡る鉢で、時期は後期末(本江広野新期)。51は無文の椀。52は側辺が平な磨製石斧で、時期は中期であろう。石質は黒色で白い粒が混じる安山岩と思われる。

#### B. 奈良末~平安初期(第20~24図、図版14~16)

十師器(53~55)・須恵器(56・57)がある。

53は口縁端部が丸みのある鍋。54・55は口縁端部が三角形になる甕。56・57は底部が薄く平坦で、体部の外傾度約50度である。これらの時期は8世紀末~9世紀初期とみる。

#### C. 平安末~鎌倉前期(第20~24図、図版14~16)

土師器、珠洲、常滑または越前(渥美が含まれるかもしれない)、瀬戸、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器、製塩土器、石製硯、鉄滓、フィゴの羽口、炭化米がある。

#### 掘立柱建物

SB01 (58) 58はP9出土のロクロ土師器椀 (注1)。ほかにP3から土師器が出土した。

**SB02** (59・60) 59はP20出土の土師器皿、60はP14出土の小さい玉縁の白磁椀。ほかにP2・P4・P18から土師器皿、P4から白磁、P18から鉄滓が出土した。

SB03 (61~67) 61はP11、62はP19、63・64はP2出土のロクロ土師器椀。64は底部に糸切り痕を残す。65はP18出土の土師器で、底部が厚く高台状になる。66はP16、67はP15出土のヨコナデ土師器皿(注2)で、口縁部のヨコナデが二段になるいわゆる二段ナデの皿。67は高台が付く。ほかにP4・P6・P10・P13・P14・P17・P18・P19から土師器、P15から製塩土器が出土した。

(注1・2) ここで、ロクロ土師器というのは、ろくろの回転力を使って成形した素焼き土器で、底部に糸切り痕を残す。ヨコナデ土師器というのは、手づくね成形の素焼き土器で、口縁部を横なでするもの。筆者はこれまで中世の素焼き土器については、土師質小皿、土師質土器、かわらけなどという用語を用いてきたが、近年は中世土師器と呼ぶ研究者が多いので、それにならう。なお、北陸地方の研究者は、ここでいうヨコナデ土師器を非ロクロ土師器と呼んでいる。 [宮田1995]

**SB04** (68~71) 68はP8出土のロクロ土師器椀。69はP1出土のヨコナデ土師器皿。70はP8出土の土師器。底部が厚くいわゆる柱状高台のもの。71はP1出土の白磁小壷。ほかにP3~7・P9・10から土師器が出土した。

**SB05**( $72\sim74$ ) 72はP2出土のロクロ土師器。底面はヘラケズリされ、刺突状のくぼみがある。73はP2、74はP3出土のヨコナデ土師器皿。74は二段ナデである。ほかにP1・4・5から土師器が出土した。

**SB06** (75・76) 75・76はP4から出土したロクロ土師器皿。ほかにP1・2から土師器、P2・4から製塩土器と鉄滓が出土した。

建物付近の包含層(110~219) SB02~06建物群の包含層中から、土師器、珠洲、越前、常滑、白磁が出土した。

110~114・116~119はロクロ土師器皿で、底部に糸切り痕が残る。115はロクロ土師器の柱状高台皿。底部は糸切り後へラケズリをしている。202・205も同様の皿と思われるが、202は底部が中空である。200はロクロ土師器椀。底部は糸切り。201は浅く復元したが土師器椀であろう。203・204はロクロ土師器。底部は糸切り後へラケズリをしている。203は底部がわずかに上げ底状になる。206・307は二段ナデ土師器皿。

208は珠洲壷。ラッパ状に開く頚部と口縁部断面が三角形に尖る特徴は、法住寺 2 号窯に類例を見いだすことができ、珠洲編年第  $\Pi$  期(13世紀前半)にあたると思われる[吉岡1994]。209は大きく開く頚部にやや受け口状の口縁部がつく。外面はあずき色の色調、内面は灰がかぶる。常滑または越前の広口壷とみられる。口縁部は狭い縁帯をなす特徴から、常滑第二段階(12世紀後半~13世紀中葉)にあたるものと思われる[赤羽1977]。210は灰白色をした壷の底部で、常滑と見られる。常滑とみられるものには、押印文があるものがある。また、灰黒色で弧状沈線文がある破片もあり、渥美ではないかと思われる。なお、ここで常滑または越前とするものは、梅原胡摩堂遺跡でも類似したものが出土している。吉岡康暢氏はそれを珠洲  $\Pi$ 1期のものと位置づけている[吉岡1994]。

211・212は口縁部が大きい玉縁となる白磁椀IV類、213は縦の沈線を引く白磁小壷。214~216は白磁皿VII類。216は底部にわずかに高台状のものを削り出した白磁皿VII類。217~219は白磁椀の底部である。これらの白磁は、中国宋代の輸入品である。椀IV類・皿VII類・VII類は、わが国では11世紀後半から現れ、12世紀に入ると増加するといわれる[横田・森田1978][山本1995]。

#### 土坑

SK01 (77・78) 77はロクロ土師器椀。78は外反する口縁部で、外面はあずき色の色調、内面は自然釉がかかる。 越前または常滑の甕か壷とみられる。口縁端部が尖り縁帯がまだ無い特徴は、常滑第一段階(12世紀中葉)に類似する「赤羽1977」。覆土を水洗いしたところ、炭化米が出土した。

SK02 (79・80) いずれもロクロ土師器皿である。底部が厚く高台状になる。

SK03 (85~99) 85~95はヨコナデ土師器皿である。口縁部は外傾する。ヨコナデ幅が比較的狭い86・90・94・95 とやや広い85・87~89・91~93に分けることができる。広いものには、85・95のほうに口縁端部が屈曲して立つものがある。93は二段ナデの名残りをとどめる。95は口縁部が直立ぎみに立つ。

96は白磁椀。97・98は青磁蓮弁文椀。青磁蓮弁文椀は龍泉窯系の輸入磁器で、わが国では13世紀初頭から出土がみられ中頃に増加するとされる[山本1995]。

99は石製の硯である。石材は緑灰色しており粘板岩とみられる。幅7cmの長方形であるが、長さは不明。上部に四ッ葉形の彫り込みがある。同じ形態のものは知らないが、四葉形の装飾は福岡県太宰府跡や神奈川県千葉地遺跡などから出土している硯にみられ、水野和雄氏はその時期を13世紀代とする[水野1985]。このほかに珠洲の叩き甕の胴部、瀬戸瓶子、製塩土器、鉄滓が出土している。SK03の北側に隣接するP19から、漆が付着した土師器が出土した(図版15下)。この土師器は、漆の塗装作業に用いた容器である。

SK04  $(81 \cdot 82)$  いずれもヨコナデ土師器皿。口縁部のヨコナデは狭く外傾するが、81はやや内傾、82は外反する。ほかに外面に褐色釉がかかる褐釉陶器とみられる胴部片(図版15下)が出土した。

SK05 (83・84) いずれもヨコナデ土師器皿。口縁部のヨコナデは狭く外傾する。ほかに白磁が出土した。

SK07(100~102) 100・101はヨコナデ土師器皿。100は口縁部の幅が広く、端部が立つ。102は外反する口縁部で、外面は灰色がかったあずき色である。常滑または越前の広口壷とみられる。口縁端部が下方に垂れて縁帯をつくる特徴は、常滑第二段階(12世紀後半~13世紀中葉)に類似する[赤羽1977]。

SE01 (103・104) いずれもヨコナデ土師器皿。口縁部のヨコナデは広く外傾する。 覆土を水洗いしたところ、炭化米が出土した。

**×9Y16区一括**(105~109) いずれもヨコナデ土師器で、口縁部が二段ナデの土師器皿。 ただ、66・67 (SB03・P16 出土) の二段ナデ土師器皿の口縁部が外傾するのに比べ、これらはナデ境の稜線があまく、端部がやや内湾する点で違いがある。

SX01(220~244) 土師器、製塩土器、白磁、瀬戸、鉄滓、フイゴの羽口が集石の間から出土した。220~222はロクロ土師器皿、220・222は底部ヘラケズリ、222は底部を焼成前に穿孔している。223は高台が付く土師器皿であろう。224・225はロクロ土師器椀。226は二段ナデ土師器皿。下層集石南の穴から出土した。227~229は、赤褐色の色調、砂っぽい胎土、器表面の細かいひび割れや接合痕を残すなどの特徴があり、製塩土器と思われる。製塩土器は、細かく割れており全体を復元できるものはない。底部は厚さ1㎝ほどの厚みがあるので、比較的残りがよく、底径は約7.5㎝である。口縁部が1点あるが、厚さ5㎜と薄く小片であるので口径は不明。ラッパ状に開くらしい。胴部の破片は厚さ5~7㎜のものがあり、それらをつないでみると、おおよそ口径15㎝、高さ17~18㎝ほどの高さになるのではないかと思われる。製塩土器の量は、整理箱に1箱ほどあるが、底部の数は5個体ほどである。

230は、胴部に3本の沈線が巡る瀬戸灰釉小壷である。類例を知らないが、他の遺物との共伴から、その時期は12世紀後半と思われる。

231~233は小さい玉縁の白磁椀Ⅲ類、234は白磁輪花杯 I 類、235~237・239~241は白磁ⅢⅥ類。242~244は白磁 椀Ⅴ類で内面に陰刻線体があり、猫掻風の波状文がある。口縁部は242はやや肥厚するが243はくの字に折れる。椀Ⅲ類・Ⅴ類・ⅢⅥ類は、わが国では11世紀後半に現れ、12世紀に入ると増加するといわれる[横田・森田1978][山本1995]。

SD01(245~274・285~289) 下層から、土師器・珠洲・白磁・青磁、上層から土師器・珠洲・青磁・青白磁・越前などが出土した。245は、ロクロ土師器椀。底部には糸切り痕があり、くぼみがある。246は高台が付く土師器、247は二段ナデの土師器皿。248~267はロクロ土師器皿である。口径7.5~10㎝の小皿と13~17㎝の大皿がある。口縁部は外傾するが、248~254・256~260は口縁端部が屈曲して立つ。266はヨコナデ幅が広く外反ぎみである。267は口縁部が直立ぎみに立つ。268は珠洲の鉢で、体部上部と口唇部に櫛書き波状文が巡る。吉岡康暢氏はこれを堤子と呼び珠洲第Ⅰ期(12世紀中葉・後葉)に含める。269は口傾部が外傾口縁の片口鉢で、珠洲編年第Ⅱ期(13世紀前半)である[吉岡1994]。270は小さい玉縁の白磁椀Ⅲ類。271は白磁椀の底部。272は白磁椀Ⅴ類。273は白磁小壷の底部。274は白磁壺の底部。白磁はほかに水注の頚部もある。

280はロクロ土師器皿。281~284はヨコナデ土師器皿。281~283は口縁部のヨコナデ幅が比較的狭いが、284はやや広い。281は二段ナデの名残りをとどめ、282は口縁部が直立ぎみに立つ。285~288は珠洲片口鉢。285は269と同類であり珠洲編年第Ⅱ期(13世紀前半)、286は口縁部が外傾するものでやや肥圧ぎみであり珠洲第Ⅲ期(13世紀後半)、288は口端面が内側に傾斜し櫛目波状文を巡らす。西方寺2号窯に類例があり珠洲編年第Ⅵ期(15世紀後半)にあてられる[吉岡1994]。288は断面に漆が付着し、補修されている。289は白磁。290は青磁。291は蓮弁文がある青白磁合子。292は青白磁合子の蓋である。青白磁合子は12世紀中頃から後半に増加が認められるという[山本1995]。図示していないが、青磁には、12世紀後半の指標とされる内面劃花文の椀もある。

SD02 (275~277) 275はロクロ土師器皿、76は二段ナデ土師器皿である。277は小さい玉縁の白磁椀Ⅲ類である。その他の包含層 (278・279・293~308) 近世以降の遺構や平安末~鎌倉前期の遺構群とは離れた調査区の包含層出土のものである。278・279はSD04・05から出土したものだが、この遺構は近世遺構の水田の用水路とみられるものである。278・279・293~296はヨコナデ土師器皿。298・279はヨコナデ幅が広い。298は端部が立つ。293~295はヨコナデ幅が二段ナデの名残りを残す。296は口縁部が直立ぎみに立つ。297は小さい玉縁の白磁椀Ⅲ類。298・299・301は大きい玉縁の白磁椀Ⅳ類、300は白磁椀Ⅴ類。302は口縁端部が口禿の白磁皿IX類。303は連弁文を孤線と縦線で表現する青磁椀。このような青磁椀は、16世紀前半から中葉に出現するといわれる。

304~307は珠洲。304・305は口縁部が方頭くの字口縁の甕で、馬緤窯に類例があり珠洲編年第Ⅲ期(13世紀後半)。306は口縁部が水平口縁の片口鉢で珠洲第Ⅳ期(14世紀前半)。307は胴部上位に櫛目波状文を巡らす小型壷で珠洲編年第Ⅲ期(13世紀前半)。

308は常滑と思われる甕の口縁部。口縁端部を上下に拡張させる特徴は常滑第三段階(13世紀後半~14世紀中葉)にあたる[赤羽1977]。

309は瓦質すり鉢。軟質で内外面黒色。内面におろし目がある。畿内では瓦器すり鉢は14世紀末に出現するようである[菅原1989]。

#### 5.8地区の概要

#### (1) 地形と層序

8 地区は南側で海抜約69m北側で約68mで、北へ向かってゆるやかに傾斜している。地表から黄白色の地山面までの深さは25~50cmで、その間は大きく二層に分かれる。①層は現代の耕作土で約20cm、②層は暗灰黄色で10~30cmで、江戸~大正時代の堆積土である。中世以前の包含層は認められない。

#### (2) 遺構(第9図・図版10)

調査区南西部と北側中央部で中世の溝 3 (SD01・03・05) が発見された。また北側東寄りでは自然川跡とみられる落ち込みがあった。その他江戸~大正時代の水路SD02・04や穴SK01がある。

#### SD01 (第9図・図版10)

幅3 m深さ90cmで、底が平坦な溝である。東西にのび、西側で北へ流れ自然河川とつながるものと思われる。出土遺物は、土師器と砥石があり、時期は12世紀後半~13世紀とみる。

#### SD03 (第9図・図版10)

幅2.2m深さ40~50cmで底が平坦な溝が約8.6mの間をおいて東西に並行する。この溝はコの字状につながるらしく、 南溝の落ち込みがある。方形に巡るとすれば、敷地を区画する区画溝になる。出土遺物は珠洲・青磁があり、時期は 13世紀後半とみる。

#### SD05 (第9図)

幅1.2m深さ30cmで、底が平坦な溝。東西にのびる。出土遺物はないが、覆土が黒褐色でSD03と同じである。

#### (3) 遺物 (第19図・図版13)

縄文時代後期、平安末~鎌倉時代のものが整理箱で1箱ある。

#### A 縄文時代 (第19図・図版13)

縄文土器 (310・311) ・打製石斧がある。310は口縁部に凹線文が巡る後期後葉の深鉢、311は条痕文があり晩期後葉の深鉢と思われる。

#### B 平安末~鎌倉時代

土師器・珠洲・瀬戸・青磁・白磁・鉄滓・砥石がある。

**SD01** (312・313) 312はヨコナデ土師器皿。ヨコナデ幅が比較的狭い特徴から、時期は12世紀後半~13世紀前半と思われる。313は凝灰岩製の砥石。

SD03 (314) 314は珠洲片口鉢。口縁部が外傾する特徴は珠洲編年第Ⅲ期(13世紀後半)になろう。ほかに珠洲甕洞部と青磁が出土している。

**包含層** (315~317) 315は玉縁口縁の白磁皿。316は青磁皿。317青磁蓮弁文椀で、13世紀前半か。このほかに瀬戸・ 鉄滓がある。

#### 6 9地区の概要

#### (1) 地形と層序(第2・6図)

9地区は海抜約72.4mである。地形は、調査区南東から北西にむかってゆるやかに下降する。地表から地山面(遺構確認面)までの深さは60~70cmあり、その間は大きく4層に分かれる。①層は現代の耕土、②層は灰黒色土で江戸時代の遺物が含まれる。③層は黒褐色砂質土で中世の遺物を含み、⑤層は平安時代前期、縄文時代の遺物を含む黒色土である。④層の黄褐色砂礫土は部分的に含まれるもので、③層と⑤層の間にあることから、平安時代と中世の間で川の氾濫があったと思われる。



第6図 9地区の基本層序

#### (2) 遺構(第17、18図、付図4)

平安時代前期の竪穴住居跡1・掘立柱建物1、中世の土坑8・井戸1・区画溝1・ピット群等がある。

#### A. 平安時代

#### **竪穴住居跡SI01**(第17図、図版11・12)

調査区中央部南よりに位置し、南北4.5m×東西3mを測る。建物の方位は南北方向より西に5度ふれる。床面積は約13㎡である。ただし、東側半分をSK01に、南側を若干SK02によって切り取られているため、完全な形での検出は出来なかった。住居跡中央部分には貼床を施し、南西部隅にカマドが設けられている。カマドの南には、南北70㎝余り、東西80㎝~1 m、深さ約10㎝のP14が存在する。P14の埋土は焼土混りの褐色砂質土であることから、SI01のカマドに伴う煙道の役目を果たしていたと思われる。貼床は3~5㎝の厚さで、暗褐色の砂質土を敷いており、かなり堅く締まっている。SI01の出土遺物は、須恵器の杯・蓋、土師器小型甕・甕の底部等、P14からは土師器の甕の体部が出土している。これらの遺物から、住居跡の時期は9世紀前半と考えられる。

#### 掘立柱建物SB01 (第18図、図版11)

調査区の西側、地山が礫で覆われた部分に位置する。2間(4.5m)×2間(4 m)の、やや南北に長い総柱建物である。棟方位は東に5度ふれる。面積は約18㎡。SB01P1~P9の柱穴群の掘り方は方計に近い円形で、直径40~50 cmを測る。深さは20~30cmで、礫層を掘り込んでいる。SB01P2の南30cmの所に、直径30cmのP7が存在する。P7からは須恵器の甕(時期不明)が出土しているが、建物の柱穴から出土遺物はない。そのため、建物の時代特定は難しいが、柱穴内の埋土が黒色砂質土であることから、古代の建築物と考えられる。

#### 溝SD04 (第18図、図版12)

SD04は調査区西側、SB01のP5とP6の中間から南に向かって真っ直ぐに伸びている。幅約80㎝、深さは深い所で20㎝、浅い所で約5㎝である。埋土は黒褐色砂質土であるが、遺物は出土していない。先端部分でSB01P6に切られている。SB01の排水路的役割をになっていたとおもわれる。

#### ピット群 (第17・18図、図版11・12)

規則性はないが、古代の遺物が出土しているものが幾つかある。そのなかでも、P15・P22・P5は3.5m~4mの間隔でP22を軸に南と西にほぼ直角に交わっており、建物跡を構成していたようである。P15からは須恵器甕の体部破片、P22・P5からはともに、土師器・甕の体部破片が出土している。また、P9は焼土混りのピットで、土師器・甕が出土しており、周辺からも遺構内・包含層からともに古代の遺物の出土が目立つ。

#### 土坑SK01 (第17図、図版11)

調査区中央部よりやや東側に位置する。長軸5m×短軸3m、深さは約90cmを測る。長方形の大型土坑である、基

本土層③層黒褐色土から掘り込んでおり、SI01の東側半分を切り取っている。出土遺物には中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁といった中世の遺物だけではなく、古代の土師器甕、須恵器甕、製塩尖底土器も出土しており、SI01で使用されていたであろう遺物を含んでいることがわかる。

#### SK02 (第17図、図版11)

調査区中央部南側に位置する。ほぼ、方形をなし長軸2.5m×短軸2.3mを測る。東側約3分の一を深さ約45cm、残りの西側3分の2 は深さ60cmで底が2段になる。深い所には、20~50cm大の石を詰め込んでいる。この石は河原石であるが1角を打ち欠いてある。うち欠いた面を外側にして石垣のように積み上げてあったものと推定される。(図版12の9)出土遺物には、SK01同様、SI01の遺物であろう土師器・須恵器を含む。中世遺物には、土師器皿、珠洲等がある。

#### その他の土坑 (第18図、図版11・12)

SK03は一辺約2.8mの方形である。深さは約20cmで、覆土は黒褐色砂質土、礫を多く含む。出土遺物に、青磁・白磁等の中国製磁器が目立つ。その他、土師器皿、珠洲も出土している。

SK06は、長軸2.3m×短軸1.6mの南北に長い長方形をなし、深さは約20cmを測る。土師器皿らしき土器破片が出土しているが、時期は特定できない。

SK07は、長軸2.4m×短軸1mを測る。③層黒褐色砂質土より切り込んでおり、中世期の遺構と考えられる。土師器皿が出土している。

調査区中央部やや東寄りに位置するSK08は、その南辺が残っていないが、長軸3.5m×1.2mの東西に細長い土坑である。深さは約10cm。出土遺物は無かった。

#### 井戸SE01 (第17図、図版11・12)

SE01は調査区中央部南寄りに位置し、SK09、SK10に挟まれた形になっている。直径約1.5 m、深さは約1.1 m と、底に向かってすぼまっている。底に近い部分の埋土は、黄褐色砂礫土で、底の形は四角い形をとっており、井戸枠の跡ではないかと考えられる。出土遺物には、土師器の甕・椀、珠洲のすり鉢があり、珠洲は第IV期(14世紀)に属する。

#### 溝SD01 · 02 (第18図、図版12)

SD01は幅約70cm、深さ平均50cm、SK01の東方3mの所に南から北に向かって走る。SD02は幅約60cm、深さ28cmで調査区北側の所で東西に走る溝である。SD02はSD01よりやや細く、浅いがSD01とつながる。溝の南西にある遺構を囲むようにあることから、これらの遺構を外部から区画する溝と思われる。SD02からは遺構は出土していないが、SD01からは土師器皿、珠洲、青磁が出土しており、時期は12世紀後半から13世紀である。また、上層から青花が出土しており、16世紀後半以降の新しい溝が重なっている。

#### (3) 遺物 (第25~27図、図版17・18)

縄文時代後期・晩期、平安時代前期、中世のものが整理箱で36箱出土した。

#### A. 縄文時代

縄文土器318~321がある。いずれも包含層より出土したものである。318は鍵の手状の条線文がある深鉢の口縁部である。319は平行沈線文のある深鉢である。320は磨消縄文のある深鉢である。321は同心円文のある深鉢である。 これらの土器は、後期中葉に属する。この他図示していないが、晩期の条痕文の深鉢、打製石斧1点が出土している。

#### B. 平安時代

#### \$101とその周辺(322~336)

322から324は須恵器の杯、325は杯蓋、326・327は土師器小型の甕。328は土師質の高台付きの杯であるが、須恵器

の生焼けのものであるかもしれない。330は土師器の鍋である。324は高台が付くものであろう。SI01に関連すると思われる土器が、SK01・02からも出土している。355・356は土師器の椀である。331・334は土師器の甕である。332・335は土師器の鍋である。333は、製塩尖底土器である。須恵器の杯蓋の端部が丸いこと、土師器の甕や鍋の口縁部が尖り気味に立つ特徴があり、9世紀前半に属する。

P15はSI01の東3mの所にある柱穴状の穴である。土師器の鍋336と須恵器の甕の胴部344が出土した。336の口縁端部はSI01様相より一段階古い特徴である。8世紀末~9世紀初頭か。外面頸部には煤の付着がある。

#### 包含層 (337~343 · 345~348 · 361 · 362 · 374)

337~339・343は須恵器の杯である。340~342は須恵器の杯蓋である。345~347は土師器の甕である。348は双耳瓶である。361・362・374は土師器の椀である。338~343・348は、X5~10Y7~10の範囲からまとまって出土した。須恵器の杯の底部が丸いことや、杯蓋の端部が三角に尖る特徴は、SI01の特徴より一段階古い特徴で、時期は8世紀末~9世紀初頭とみる。

#### C. 中世

SK01  $(349 \sim 354) \cdot 02 (355 \cdot 358) \cdot 03 (359 \cdot 360)$ 

349は底部に糸切り痕を残す土師器の皿である。350・351は口縁部を横撫でする土師器の皿である。352は珠洲のすり鉢(片口鉢)の底部である。353は瀬戸の皿で口縁部が折れる。354は青白磁の合子の蓋である。珠洲の片口鉢はおろし目を米印に描く特徴から、珠洲編年第IV期(14世紀)に属する。

357は底部糸切りのロクロ土師器の皿である。358は珠洲の蓋の底部である。

359は体部に蓮弁文をもち、口縁部が屈曲する青磁の皿である。360は口縁部が大きな玉ぶちになる白磁の椀である。359は14世紀代に、360は13世紀代に出土が知られる。

#### SE01 (363 • 364)

363・364ともに珠洲のすり鉢である。珠洲編年第IV期(14世紀)に属する。覆土を水洗いした所、炭化した米、麦、マメ類が検出された。

#### SD01 (365~368)

365は口縁部を横撫でする土師器の皿である。13世紀に属する。367は珠洲甕の口縁部である。珠洲編年第 I 期から II 期で(12世紀後半から13世紀初頭)ある。368は内面に沈線文様のある青磁である。12世紀後半である。366は青花の皿である。上層の新しい溝に伴うものである。

#### その他の遺構 (369・370)

369は口縁部を横撫でする土師器の皿である。370が手づくねの土師器の皿である。

#### 包含層 (371~373 • 375~390)

371~373は土師器の皿である。375~381は珠洲焼である。375・376は甕の口縁部である。377・378は片口鉢である。379は壺である。380・391はすり鉢の底部である。珠洲編年第IV期(14世紀)に属する。382は瀬戸の灰釉椀である。13世紀後葉である。383は瀬戸美濃の天目茶碗、384は瀬戸のおろし皿である。385・387・389は青磁の椀である。385は14世紀、387は16世紀、389は15世紀とみる。386は青白磁の皿で16世紀に属する。388は白磁の椀である。12世紀とみる。390は瓦器の火鉢で、花紋のスタンプがある。14世紀に出土が知られる。

# 梅原落戸遺跡泥土の寄生虫分析

富山医科薬科大学 医学部 寄生虫学教室 助教授 上村 清

検体 福光町梅原落戸遺跡7地区SK01、SK02のトイレ跡と思われる遺構内の土壌

処理 直接法 グリセリンにて少量を直接検鏡

集卵法 ホルマリン・エーテル法 (MGL) 各土壌1g

硫苦食塩水薄遊法 同 上

1%リン酸第3ナトリウム遠沈法 同 上

フッ素水素酸処理法(25%) 同上

アルカリ・酸処理遠沈法 同 上

結果 SK01、02、2 検体共寄生虫卵陰性

考察 保存に強い花粉化石も見い出されないため、検体の保存状態が悪くて、寄生虫卵卵殻が保存されなかった可能 性が高い。

平成7年10月18日

## IV まとめ

発掘調査の成果から、梅原落戸遺跡の性格などについて列記してまとめとする。

- 1. 縄文時代中期・後期・晩期、奈良・平安時代、中世の遺物が出土し、奈良時代の井戸・溝、平安時代の竪穴住居 跡・高床倉庫、平安末〜鎌倉前期の掘立柱建物・井戸・集石・舟着き場・川・用水路が発見された。
- 2. 7地区で発見された平安末~鎌倉時代前期の建物群は、大井川の支流である権現堂川の川縁に立地する。梅原地内では、中世に大規模な集落が形成されるようになるが、そのさきがけとなる集落跡である。出土品には、国内産の土師器・珠洲・常滑または越前・瀬戸と輸入陶磁器の出土比率はおおよそ65%: 4%: 3%: 1%: 27%である。輸入陶磁器の割合がきわめて高い。土師器・珠洲は地元産とみても、3割近くが遠くはなれた県外あるいは国外から搬入されたものである。このような陶磁器組成や、建物群が権現堂川の川縁に立地し、舟着き場とみられる遺構もあることから、当時の物資の運搬は、舟運で行われたことを窺わせる。製塩土器は、10世紀段階で使われなくなるといわれていたが、今回の発見によって、12世紀後半にも用いられたことがあきらかとなった[小島・宇野1989]。また、これまで内陸で出土する製塩土器については、塩の運搬容器として持ち込まれたと考えられているが、この場所で製塩作業が行われていたことが明らかであり、古代末・中世初期における塩生産や流通のありかたについて、あらたな問題を提起するものといえる。この建物群の住人については、「源平盛衰記」や「承久記」にみえる武士団のひとつである河上氏ではないかと考えている。
- 3. 9地区では平安時代前期の竪穴住居跡と高床倉庫が発見された。「越中国官倉納穀交替記」には、この時期のこととして砺波郡川上村に不動倉が置かれていたという記載がある。昨年度の調査では、川上村に先立つ奈良時代前葉の川上里の時期に相当する集落跡を発見しており、今回の発見によって、梅原周辺が古代の川上の地である可能性が一段と高まった。

#### 参考文献

福光町教育委員会 1991 『富山県福光町梅原安丸遺跡群 I』

福光町教育委員会 1992 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ』

福光町教育委員会 1993 『富山県福光町梅原安丸遺跡群 I · 梅原上村遺跡群 I 』

福光町教育委員会 1994 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ・梅原上村遺跡群Ⅱ・梅原落戸遺跡群Ⅰ』

福光町教育委員会 1995 『富山県福光町梅原安丸遺跡群 I』

富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』

赤羽一郎 1977 「概説常滑」『日本陶磁全集8 常滑 渥美』

中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編

水野和雄 1985 「日本石硯考-出土品を中心として-」 考古学雑誌第70巻第4号

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』

山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編

菅原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」 国立歴史民俗博物館報告第19集

横田賢次郎・森田勉1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心にして-」 九州歴史資料 館研究論集 4

宮田進一 1995 「各地の土器様相 北陸」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 小島芳孝・宇野隆夫 1989 「北陸における塩生産」『北陸の古代手工業生産』 北陸古代手工業生産史研究会

# V 試掘調査の概要

#### 1 調査対象地

事業対象地を縦断する東海北陸自動車道の東側部分が調査対象地であり、これまでの調査から梅原加賀坊遺跡、梅原胡摩堂遺跡が広がっていると推定される部分である。現況は、標高63~78mを測る水田、畑地である。

#### 2 調査の期日

平成7年9月19日~10月20日(実働20日間)

#### 3 調査面積

調査対象面積は、110,000㎡(このうち梅原加賀坊遺跡内23,400㎡、梅原胡摩堂遺跡内87,600㎡)。発掘面積は2,664㎡で調査対象面積の約2.4%である。

#### 4 調査の方法

重機(バックホウ)及び人力でトレンチを掘り下げることによって行った。掘削深度は包含層に含まれる遺物を確認しながら順次掘り下げ、最終的には遺構確認面までとした。トレンチは幅約1 mで調査対象地内に計106本設定した。

#### 5 調査の結果

#### (1) 基本層序

第1層:耕作土、第2a層:黒褐色粘質土(中世の遺物包含層)、第2b層:黒色粘質土(古代の遺物包含層)、第3層:黄褐色粘質土(遺構検出面、地山)である。調査対象地は、遺物包含層が削平され、遺構検出面が耕作土直下に見られる箇所や逆に、耕作土の下に厚い盛土等を行っているところなどが見られる箇所があるなど、旧ほ場整備の影響を受けている。また、旧河川跡の影響を受けている箇所も多く見られる。

#### (2) 遺構 (第28·29図、図版19·20)

検出した遺構は、掘立柱建物、溝状遺構、土坑、穴(柱穴)、井戸、礎石、川跡等である。

梅原加賀坊遺跡においては、ほぼ現在の権現堂川に沿うような形で旧権現堂川跡を検出した。この中から近代陶磁器がたくさん出土しており、ごく最近まで使われていたようである。この旧権現堂川の西側の11~17Tで、掘立柱建物、溝状遺構、穴等の遺構を多く検出した。遺構検出面は現地表面から深さ20cmと浅い。遺構の時期は、出土遺物から見て中近世と思われる。

梅原胡摩堂遺跡においては、調査対象地全体にわたって遺構を検出した。ここでもほぼ現在の権現堂川に沿うような形で旧権現堂川跡を検出した。しかし川跡は、やや東へ振るようである。旧権現堂川の西側の27~53Tは、今回の調査対象地の中でも遺構密度が高い。遺構検出面は、現地表面から深さ約60cmである。遺構の時期は出土した遺物から中世と思われる。検出した遺構のうち、105T、31T、32Tで検出した川跡は、平成2年度にଠ富山県文化振興財団が発掘調査を行った際に検出したSD71(中世前期の自然河川)と推定される。また、40Tでは、区画溝のコーナーと推定される部分を検出した。

当遺跡の東側への広がりについては、現在の権現堂川を一つの区切りと予想していたが、旧権現堂川の東側部分の64~69Tにおいて出土遺物から古代と思われる遺構を多く検出した。遺構密度は調査対象地のなかでもかなり高い。遺構検出面は、現地表面から約20cmと浅い。ここは、南側から舌状に伸びる段丘上に位置し、現地形からしても権現堂川の西側部分よりも高い所である。今回の調査及びこれまでの調査結果から、遺跡の主体時期は、旧権現堂川の西側は中世〜近世、東側は古代であり、よって川の東西において遺跡が形成された時期に差異があるものと推測できる。県道田中・梅原線と金沢・井波線に挟まれた地区では中世〜近世の遺構を検出した。このうち91T、92Tでは、現

地表面から深さ $10\sim20\,\mathrm{cm}$ ほどの浅い地点で旧以速寺跡を示す礎石が見つかっている。 $91\,\mathrm{T}$ では南側に拡張したところ、約 $4\,\mathrm{m}$ の間隔をおいて別の礎石が見つかった。これらのトレンチでは、この他に旧以速寺に関連すると思われる遺構を検出しているが、今回の調査では、性格等までは把握できなかった。この他に、調査対象地の中央を南北に縦断する旧橋本川跡を検出した。現在の橋本川よりも東側にあり、これまでの発掘調査の成果から $56\,\mathrm{T}$ 付近で西へ流れを変えるようである。

#### (3) 遺物 (第30·31図、図版21·22)

出土した遺物は、縄文土器(後・晩期)、須恵器、土師器、灰釉陶器、中世土師器、珠洲、青磁、常滑、越前、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、唐津、打製石斧、石臼、砥石、羽口、鉄製品、鋳型等である。遺物は、調査対象地のほぼ全域で出土し、特に梅原胡摩堂遺跡でまとまって出土した。

第30図  $1 \sim 6$  は縄文土器、 $7 \sim 15$ は須恵器である。このうち $7 \sim 9$  は杯蓋、 $10 \sim 13$ は杯で底部を回転へう切りしている(13は調整不明)。14は高台杯、15は壺である。16は灰釉陶器の椀、 $17 \sim 20$ は土師器である。17、18は甕、19は小型甕の底部、20は鍋である。古代の遺物の時期は8世紀末 $\sim 9$ 世紀前半である。当時期の遺物は、主として梅原胡摩堂遺跡の $64 \sim 69$ T付近でまとまって出土した。特に64、65Tでは、遺物の出土量も比較的多い。21は打製石斧である。

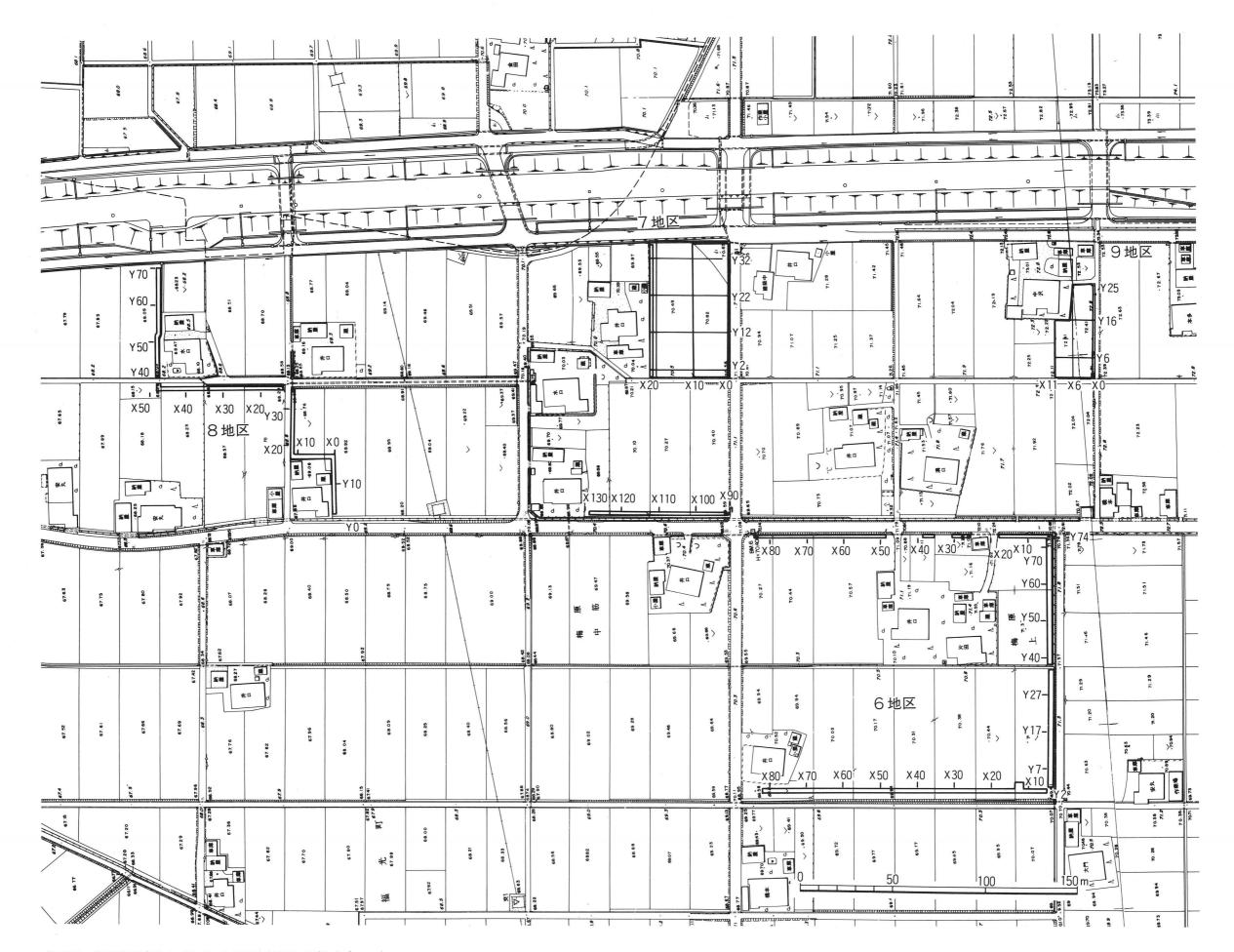
第31図22~43は中世土師器である。これらのうち29、41、43を除いては、49Tからの出土である。49Tの中世土師器は、トレンチ東端の現地表面から深さ60~90cmのところに見られる褐色がかる灰褐色粘質土から破片及び完形の状態でまとまって出土した。このように1カ所からまとまって中世土師器が出土したのは、今回の調査において49Tだけである。49T出土の中世土師器は、非ロクロ製のもので、口径は8~9 cm、12~13cmである。口縁部の形態から面取りするもの、内湾するもの、外反するもの、垂直気味に立ち上がるものなどにタイプ分けができる。24は底部の粘土が剥離している。遺物の時期は、全体的にみて13世紀前半から14世紀初である。これらは、試掘調査では遺物に伴うものとの確認はできなかったが、49Tの北側の63Tにおいて第31図46の鋳型が出土していること、1カ所からまとまって出土したこと、出土地点の褐色がかる灰褐色粘質土がここでしか確認されなかったことなどから何らかの遺構に伴う可能性が考えられる。43は47T出土である。ロクロ製で口縁部内外面に煤の付着が見られる。遺物の時期は15世紀前半である。44、45は珠洲で、このうち44は甕、45はすり鉢である。46は63T出土の中世の鋳型である。鋳型は緩く湾曲しており、直径約46cm(推定)である。周囲に3つの石を伴うような形で出土した。47は常滑または越前の甕、48~50は青磁碗で、50は底部内面に文字が見られる。51は瀬戸美濃のヒダ皿で、91Tからの出土である。52は唐津皿で、内面に砂目跡が見られる。53は伊万里である。

#### (4) 小結

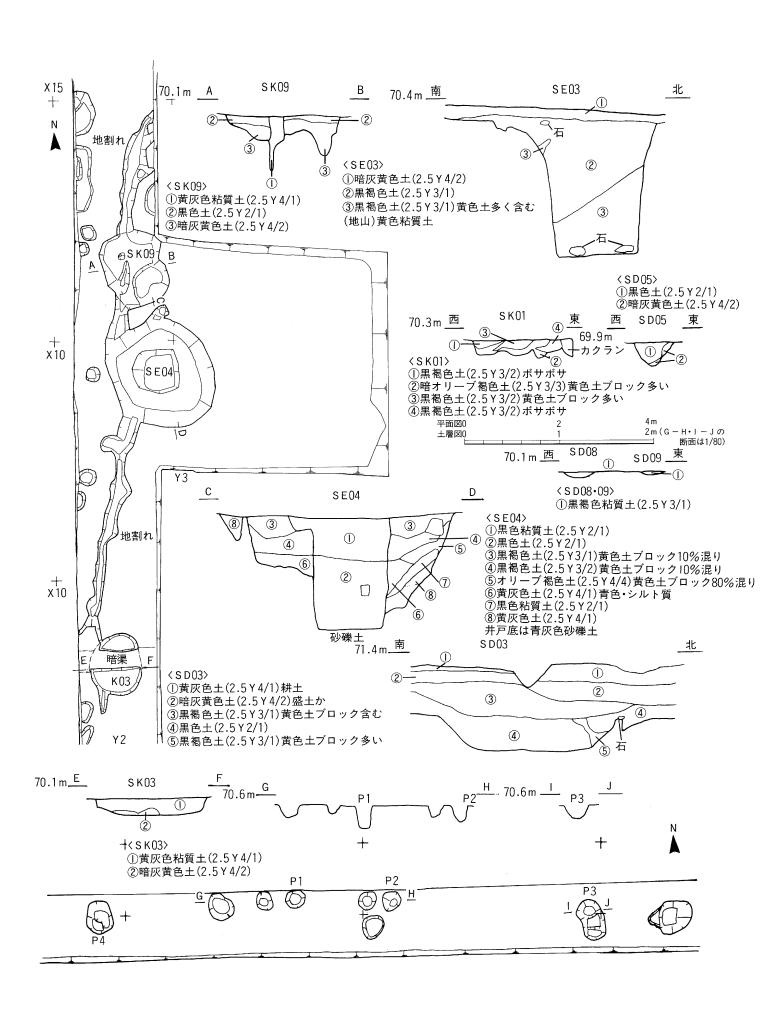
今回の試掘調査により、調査対象地の全域で古代~中近世の遺跡の広がりが確認された。これにより、梅原加賀坊遺跡及び梅原胡摩堂遺跡が東海北陸自動車道の東側へ広がるものとみられる。

梅原加賀坊遺跡では旧権現堂川以東の遺跡の広がりについては今回調査対象外であったため確認できなかったので、 現時点での遺跡の広がりは、旧権現堂川まで(調査対象地全域)とする。

梅原胡摩堂遺跡では、県道田中・梅原線以北の区域において旧権現堂川跡を検出したが、その西側は、遺構・遺物から東海北陸自動車建設に伴って行われた発掘調査結果とほぼ似た様相を示し、中世(13~15世紀)を主体とした遺跡が広がる。しかし、現在の権現堂川の東の段丘上には古代を主体とする遺跡が広がっており、旧権現堂川を境にその様相に変化がみられるとともに、遺跡はさらに東へ広がるものと推定される。また、調査対象地の南側においても遺跡はさらに南へ広がるものと思われる。今回の調査で確認された各遺跡の面積は、梅原加賀坊遺跡が24,000㎡、梅原胡摩堂遺跡が94,650㎡となる(宅地、道路等を含む)。 (池田 恵子)

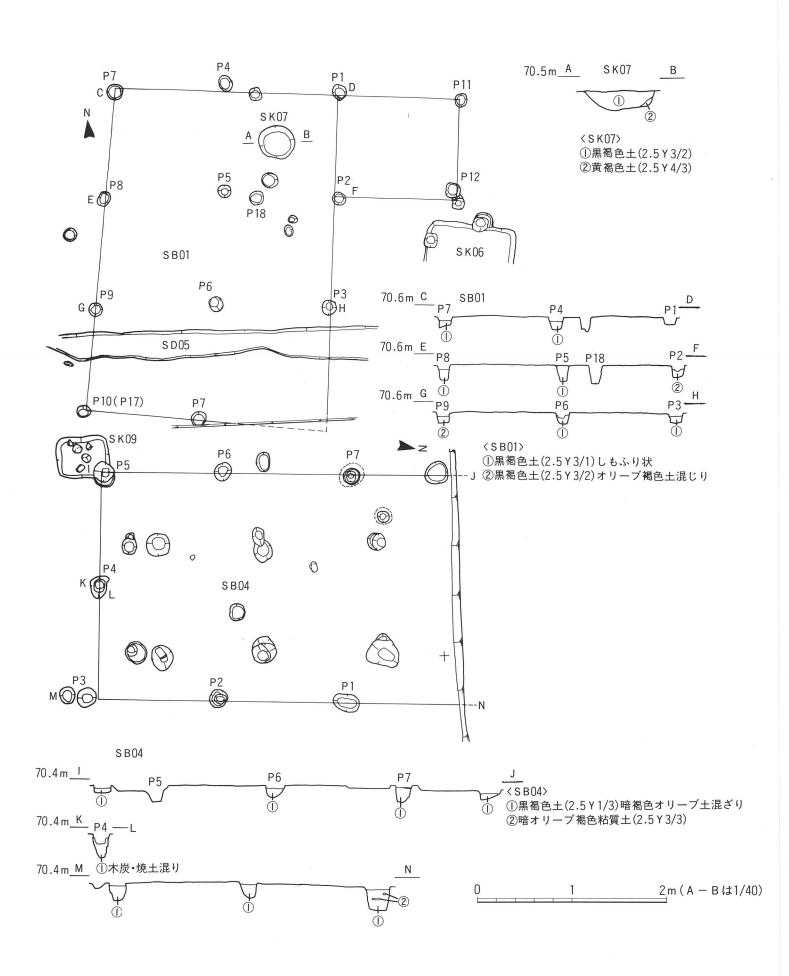


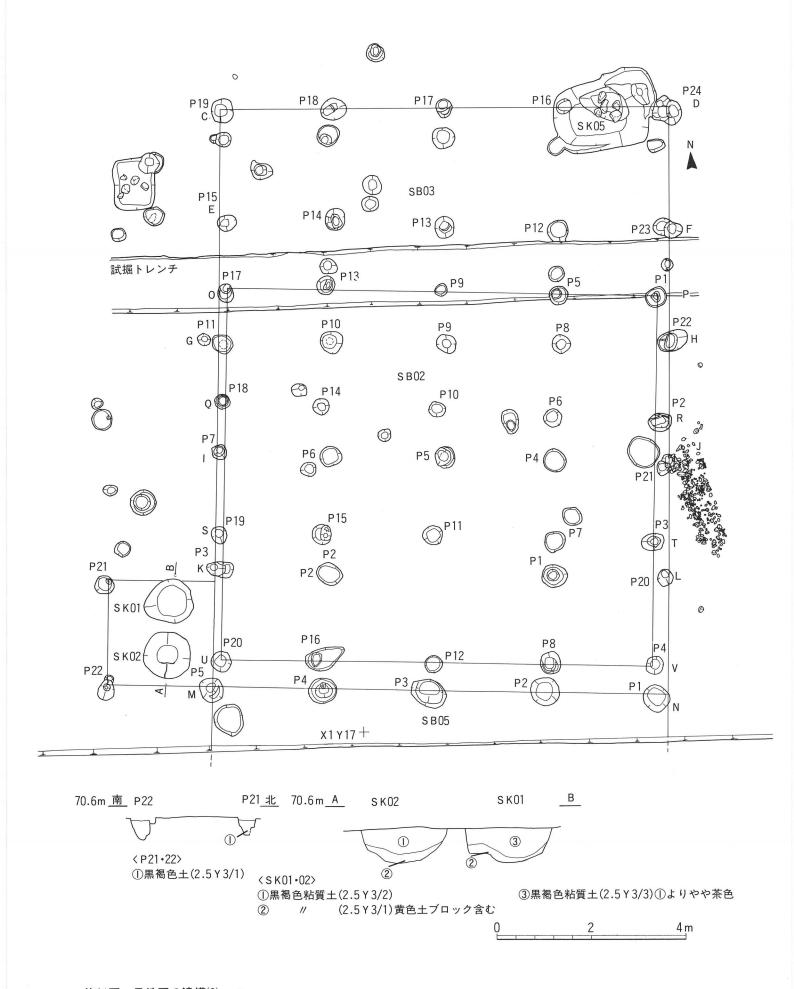
第7図 梅原落戸遺跡6・7・8・9地区の地形と区割 (1/2,000)



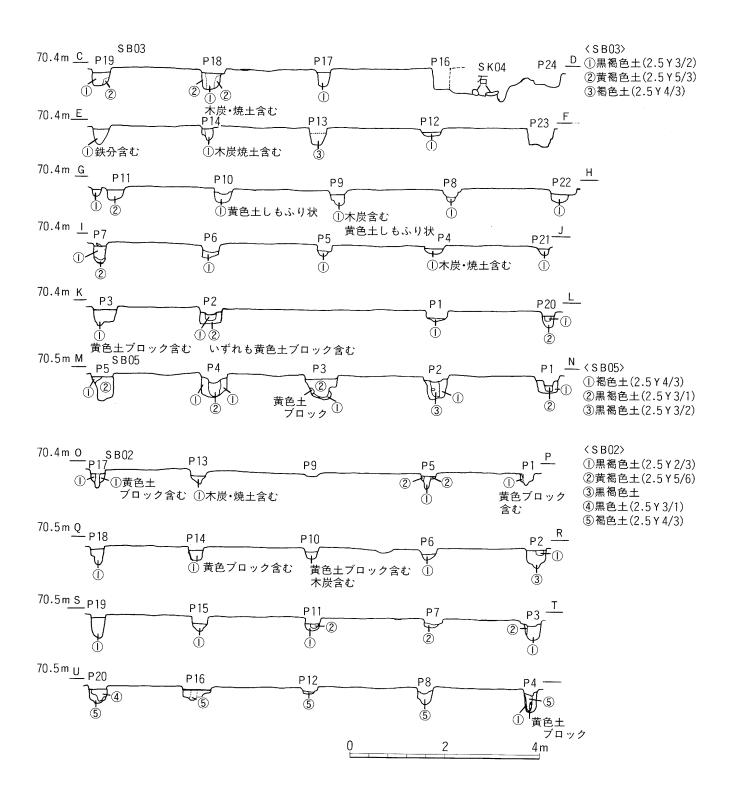
第8図 6地区の遺構 SK03・04・SK01・03・09・SD03・P1~3

第9図 **6地区(左)・8地区(右)の**遺構 (1:80) SK05~07·10·11·SD01·SD03

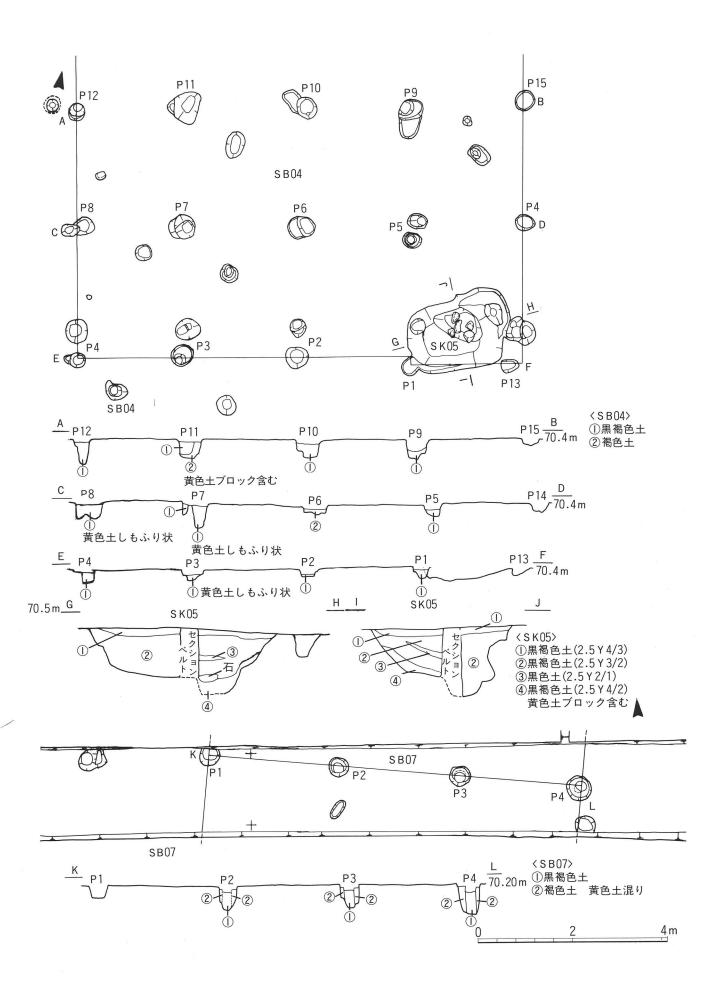




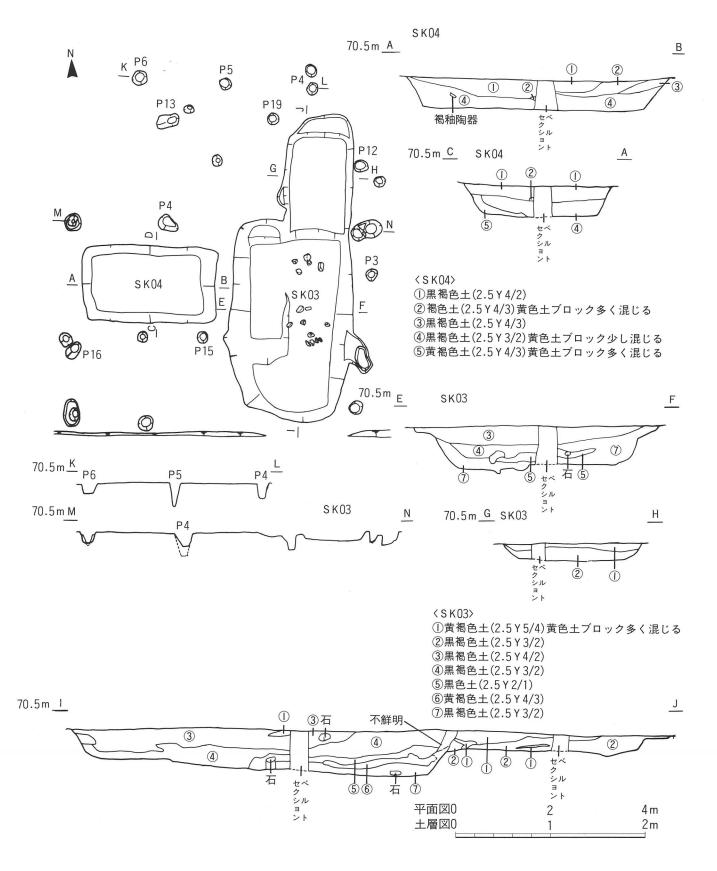
第11図 7地区の遺構(2) SB03・05・02・SK01・02



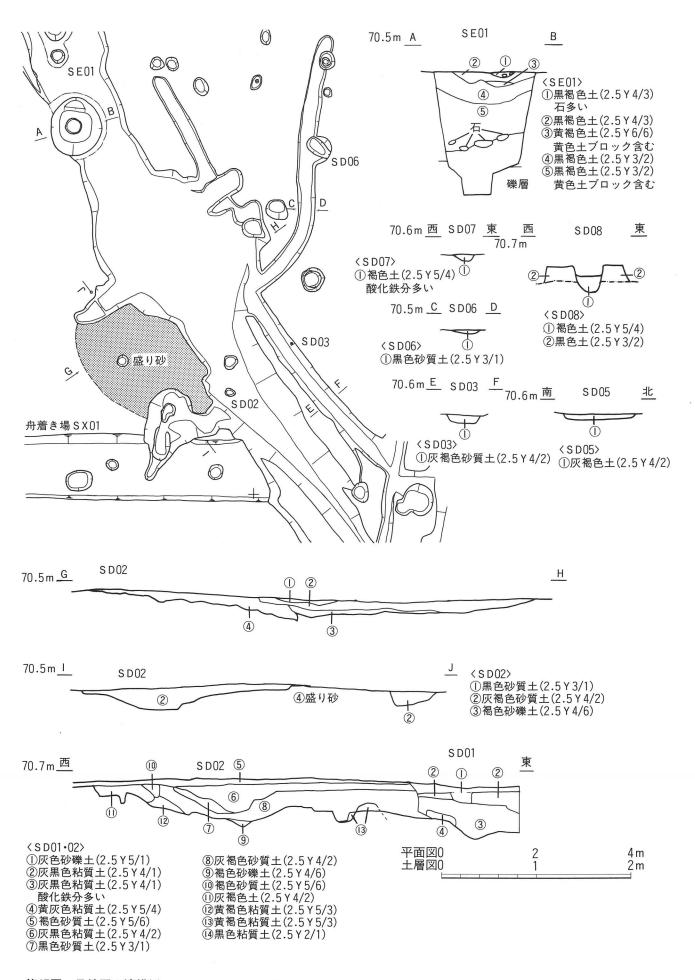
第12図 7地区の遺構(3) SB03・05・02



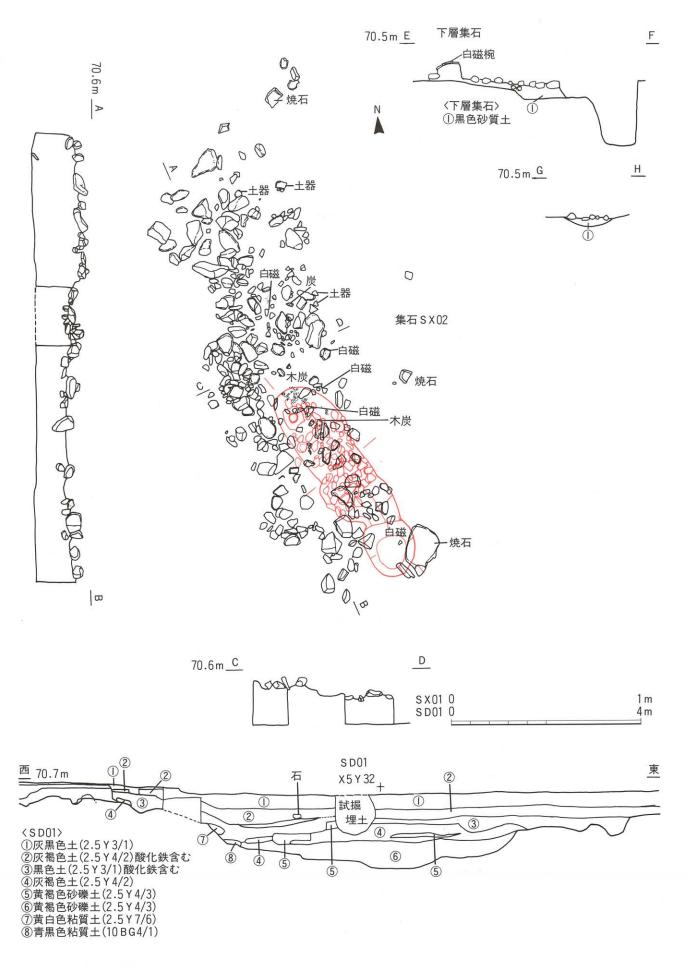
第13図 7地区の遺構(4) SB04・SK05



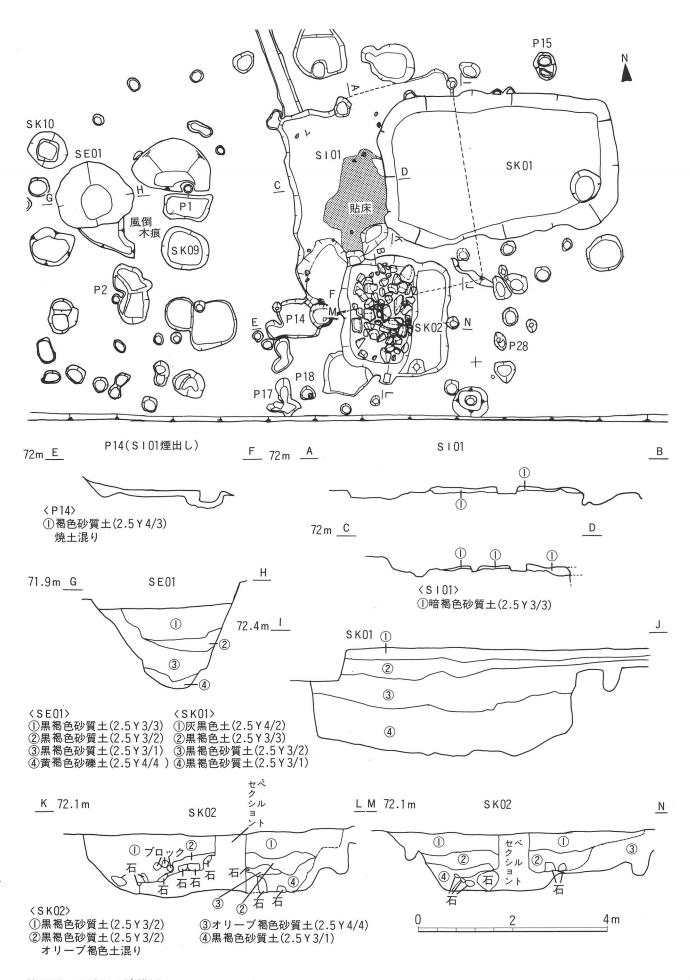
第14図 7地区の遺構(5) SK03・04



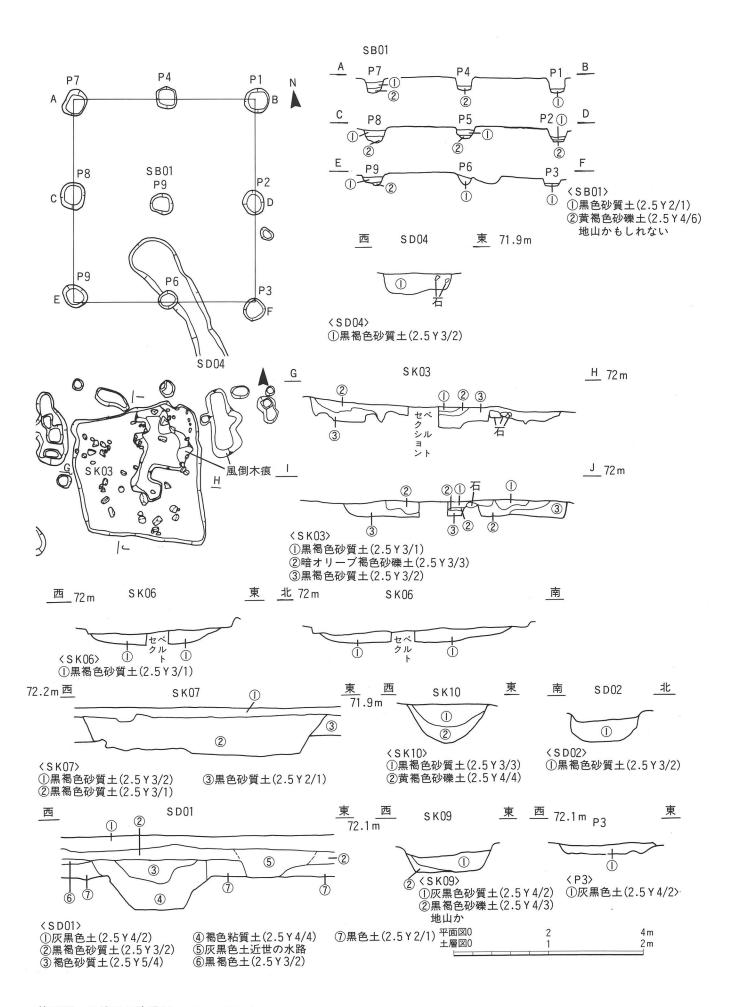
第**15図 7地区の遺構(6)** SD02・SX01・SE01ほか



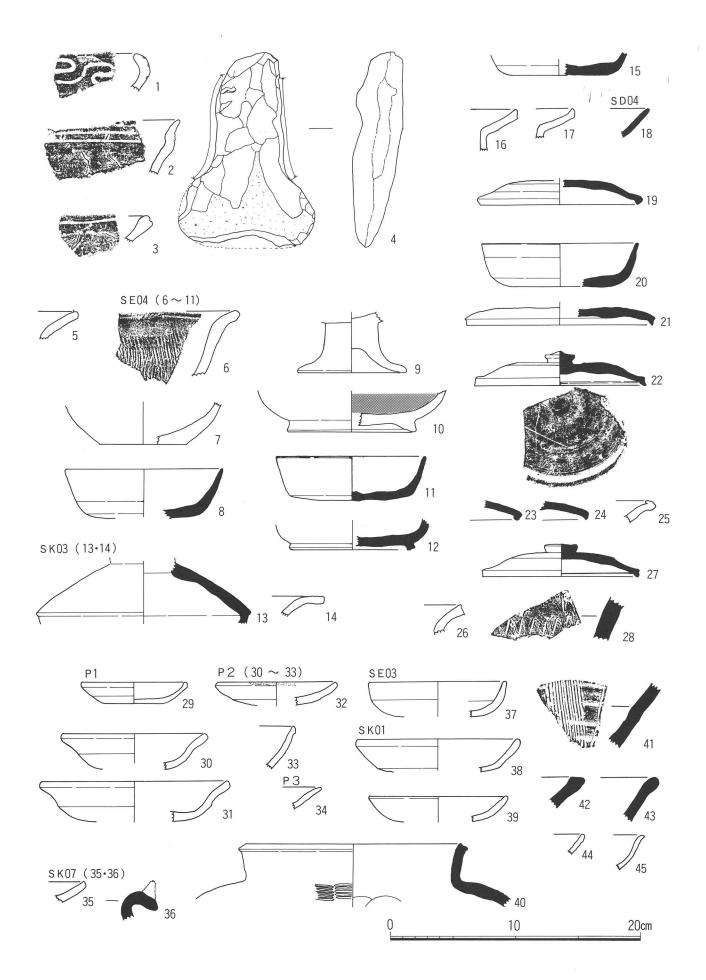
第16図 7地区の遺構(7) SX02・SD01



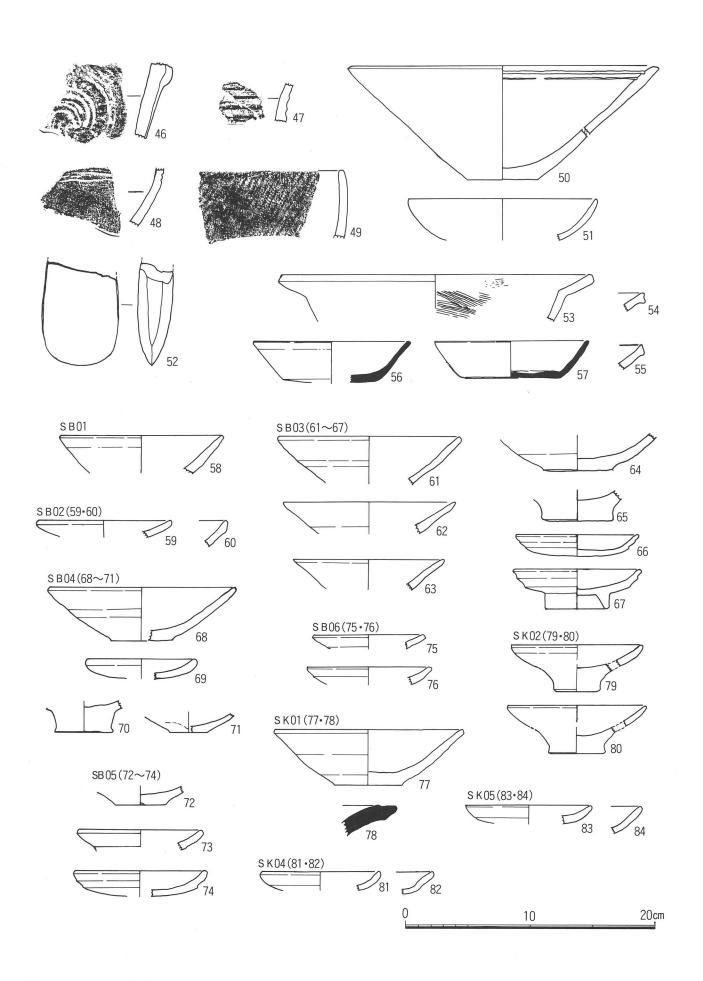
第17図 9地区の遺構(1) SI 01・SK 01・02・SE 01



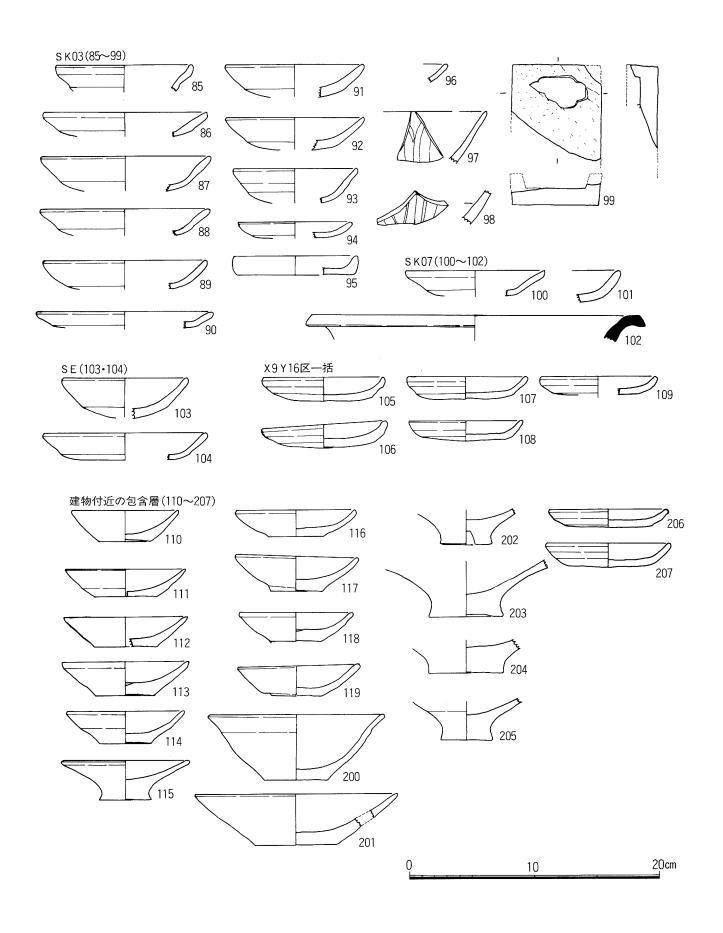
第18図 9地区の遺構(2) SB01·SK03ほか



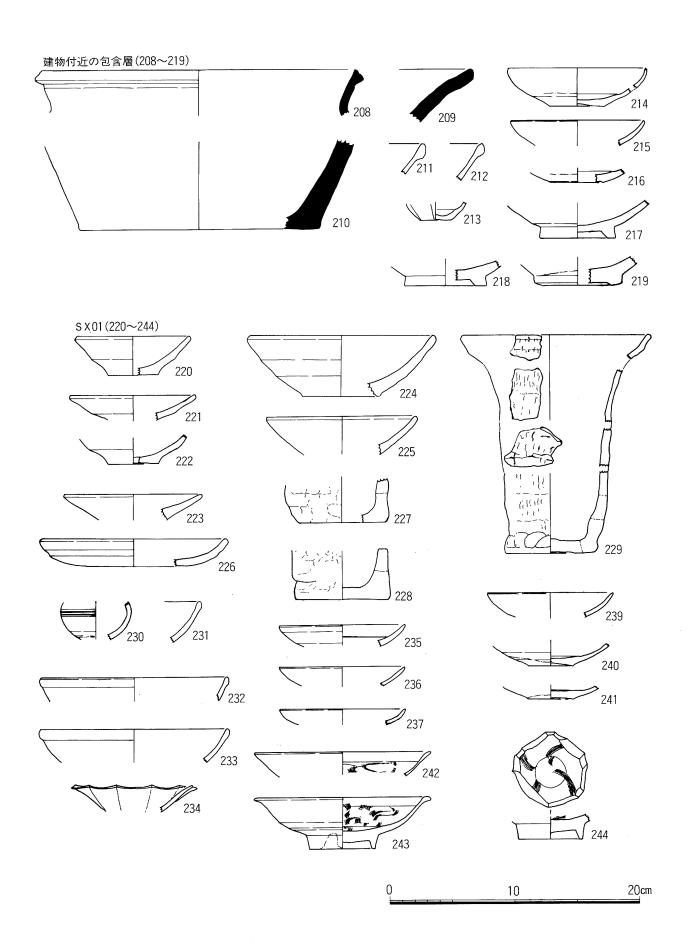
第19図 6地区出土遺物



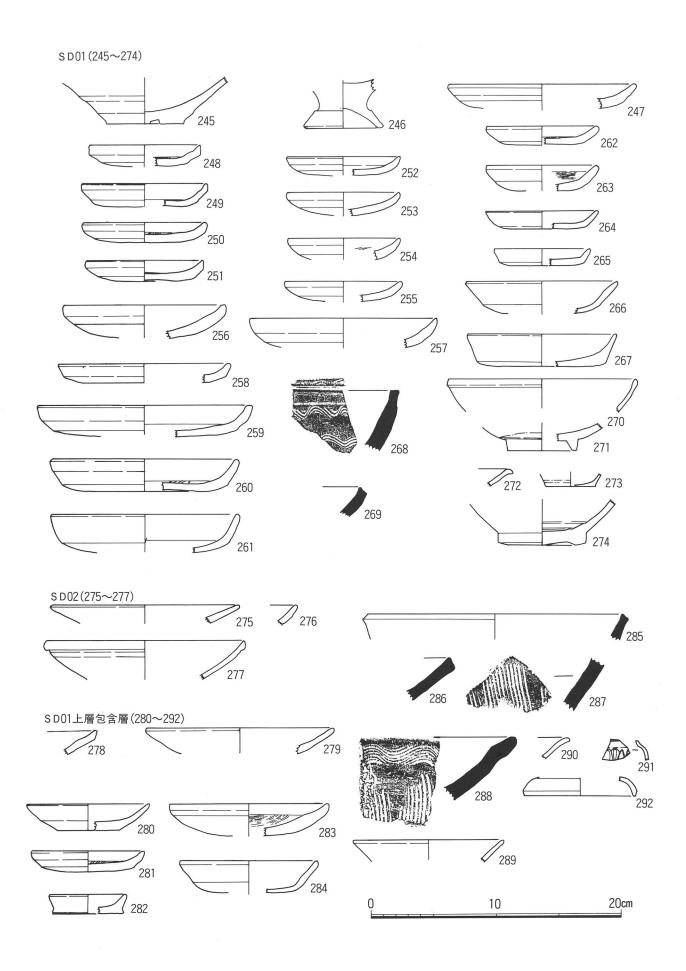
第20回 7地区出土遺物(1)



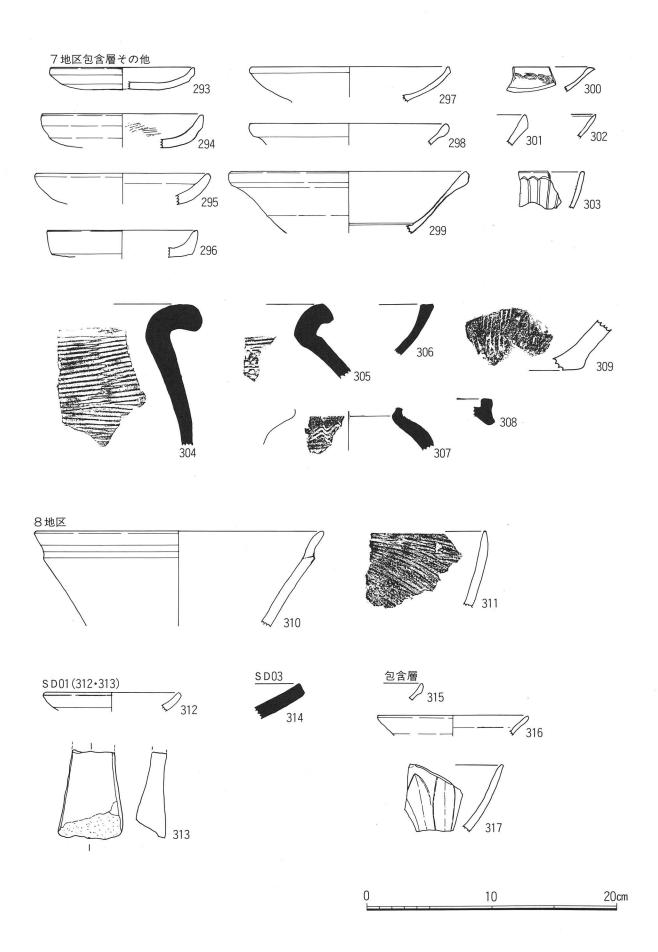
第21図 7地区出土遺物(2)



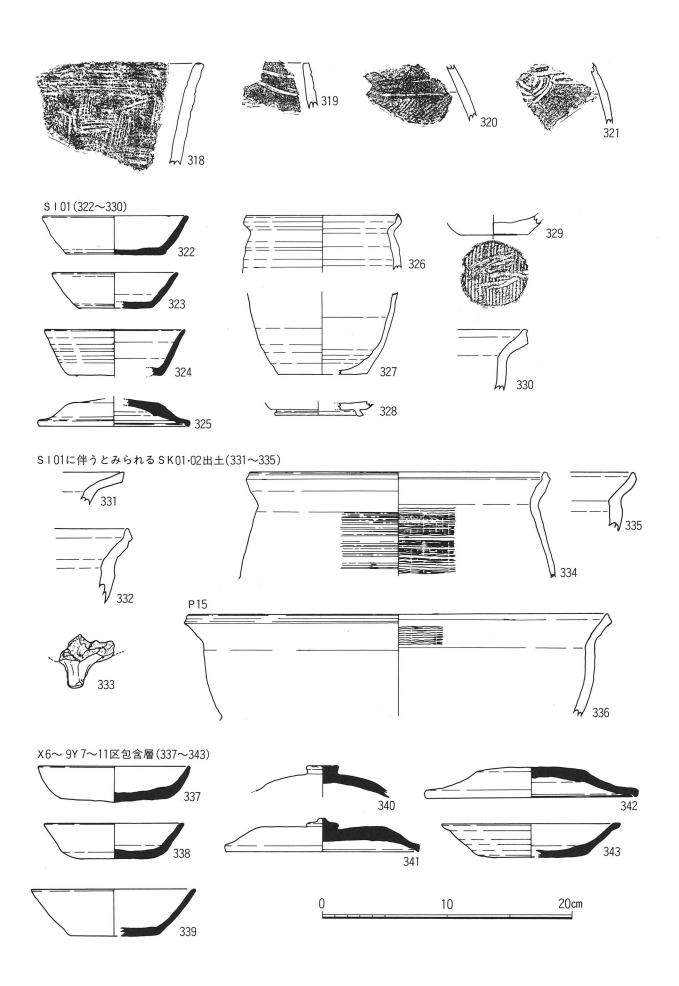
第22図 7地区出土遺物(3) 238は欠番



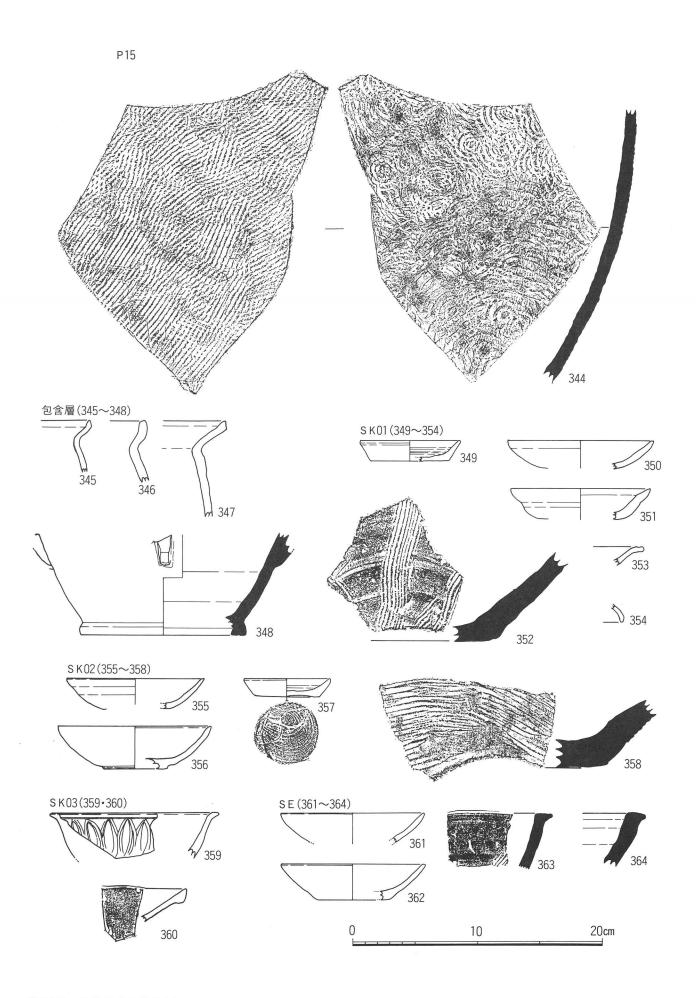
第23図 7地区出土遺物(4)



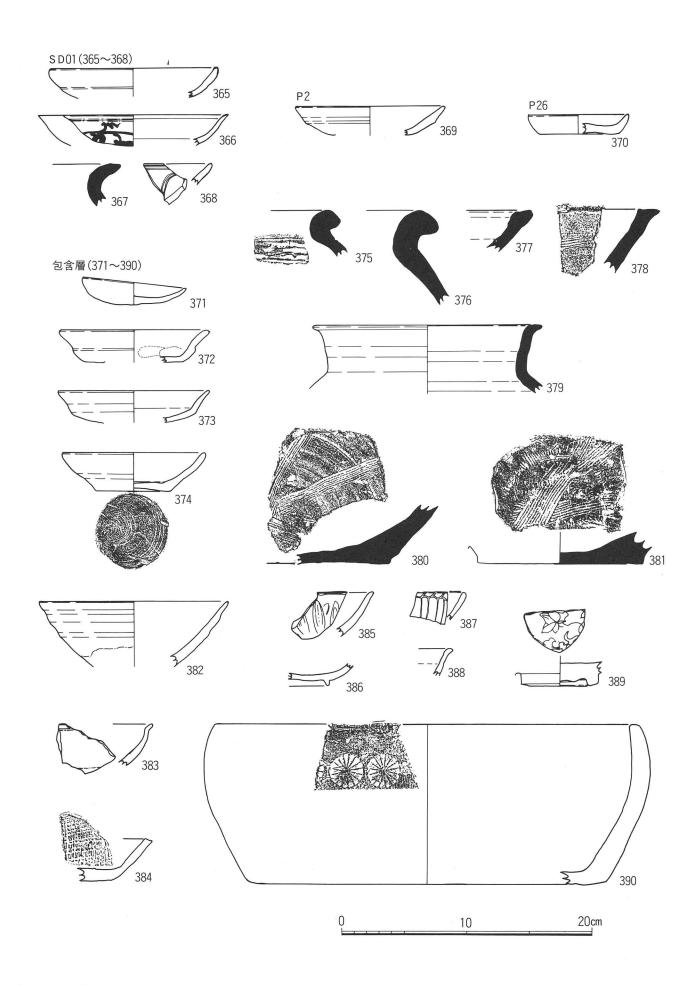
第24図 7地区(上)8地区(下)出土遺物



第25図 9地区出土遺物(1)



第26図 9地区出土遺物(2)



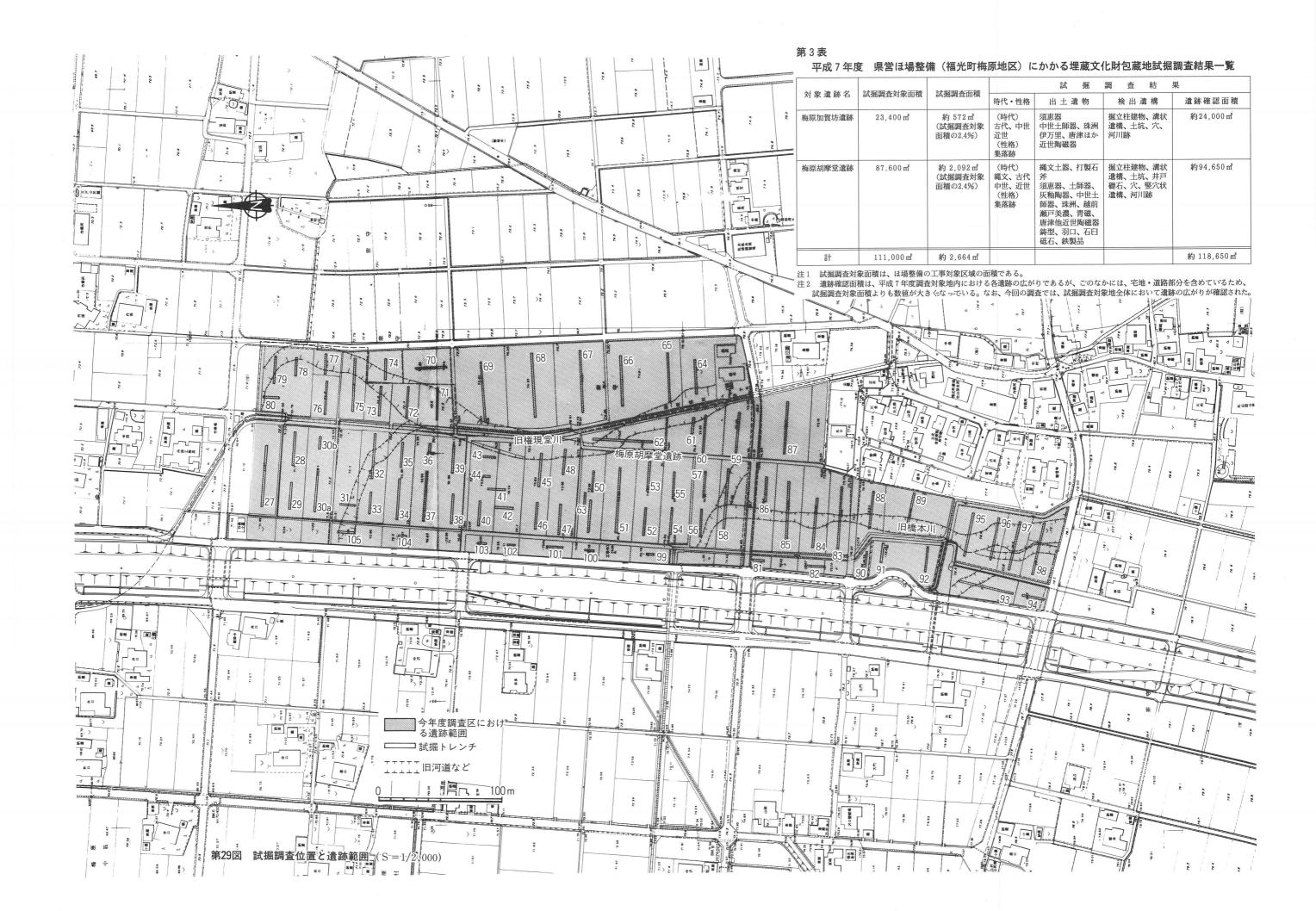
第27図 9地区出土遺物(3)

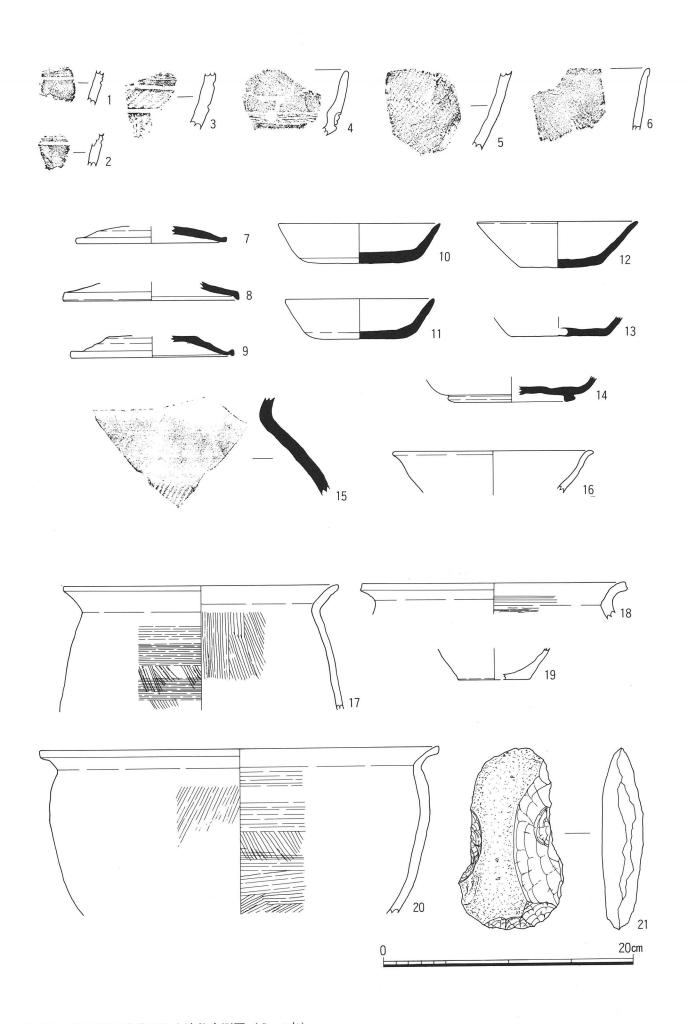
第2表 主な出土遺物および検出遺構一覧

番号	出土遺物	検 出 遺 構	番号	出 土 遺 物	検 出 遺 構
(梅	原加賀坊遺跡)		52 T	須恵器、土師器、灰釉陶器	溝状遺構(区画溝)、土坑
1 T	近世陶磁器(近代の陶磁器を含む)	河川跡(権現堂川)	53 T	縄文	溝状遺構
2 T	近世陶磁器	河川跡(権現堂川)	54 T	中世土師器	穴、井戸
3 T	近世陶磁器	河川跡(権現堂川)	55 T	中世土師器	穴、溝状遺構
4 T	近世陶磁器、珠洲	河川跡(権現堂川)	56 T	中世土師器、近世陶器	穴、河川跡(橋本川)
5 T	須恵器、唐津	土坑、河川跡(権現堂川)	57 T	不明	穴、溝状遺構
6 T	近世陶磁器	土坑、溝状遺構、河川跡(権現堂川)	58 T	縄文、珠洲、近世磁器	土坑、河川跡(橋本川)
7 T	珠洲、近世陶磁器	河川跡(権現堂川)	59 T		穴、溝状遺構
8 T	須恵器	河川跡(権現堂川)	60 T		穴、溝状遺構
9 T	須恵器		61 T		穴、河川跡(権現堂川)
10 T			62 T	近世陶磁器	川跡
11 T		掘立柱建物、溝状遺構、河川跡(権現堂川)	63 T	中世土師器、鋳型	穴、溝状遺構
12 T		穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	64 T	縄文、須恵器、土師器	穴、土坑、河川跡(権現堂川)
13 T	中世土師器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	65 T	須恵器、土師器	穴、土坑、竪穴状遺構
14 T		穴、溝状遺構、土坑	66 T	須恵器、土師器	穴、溝状遺構
15 T	近世磁器		67 T	土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑
16 T	伊万里	穴、溝状遺構、土坑	68 T	須恵器、土師器	穴、溝状遺構、竪穴状遺構
17 T		穴、溝状遺構	69 T	土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑
18T		溝状遺構	70 T	須恵器	溝状遺構
19T	伊万里		71 T	須恵器	河川跡(権現堂川)
20 T			$72\mathrm{T}$	中世土師器	河川跡(権現堂川)
21 T	近世陶磁器		73 T	近世陶磁器	穴、河川跡(権現堂川)
22 T		河川跡(権現堂川)	74 T		穴、河川跡(権現堂川)
23 T		穴、溝状遺構	75 T	土師器	穴、溝状遺構、河川跡(権現堂川)
24 T		河川跡(権現堂川)	76 T	須恵器	穴、溝状遺構
25 T	伊万里	穴、河川跡(権現堂川)	77 T	中世土師器	土坑、河川跡(権現堂川)
26 T	中世土師器	土坑、溝状遺構、河川跡(権現堂川)	78 T	中世土師器	穴、河川跡(権現堂川)
(梅	原胡摩堂遺跡)		79 T		河川跡(権現堂川)
27 T	中世土師器、珠洲	掘立柱建物、溝状遺構、土坑	80 T	中世土師器	河川跡(権現堂川)
28 T	中世土師器	穴	81 T	須恵器、中世土師器	穴、溝状遺構
29 T	縄文、中世土師器、越中瀬戸、瀬戸美濃	掘立柱建物、土坑	82 T	須恵器、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津	穴、溝状遺構
30аТ	中世土師器、珠洲、鉄製品、常滑	穴、溝状遺構、土坑	83 T	唐津、近世磁器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)
$30 \mathrm{bT}$	中世土師器	穴、土坑	84 T	珠洲、越前	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(橋本川)
31 T	須恵器、中世土師器、珠洲、青磁	川跡、土坑	85 T	珠洲、青磁	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(橋本川)
32 T	珠洲、青磁	川跡、穴、溝状遺構	86 T	珠洲	穴、溝状遺構
33 T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構(区画溝)、土坑	87 T	中世土師器	穴、溝状遺構、土坑
34 T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑	88 T	珠洲	穴、溝状遺構、土坑
35 T	中世土師器、瀬戸美濃、羽口	穴、土坑	89 T	瀬戸美濃	穴、溝状遺構、土坑
36 T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構	90 T	近世陶器	溝状遺構
37 T	縄文土器、打製石斧、中世土師器	穴、溝状遺構	91 T	瀬戸美濃、近世陶器、鉄製品	礎石、その他「以速寺」関連の遺構検出
38 T	縄文、須恵器、土師器、中世土師器、砥石	穴、溝状遺構	92 T	珠洲、越中瀬戸、近江磁器	礎石、その他「以速寺」関連の遺構検出
39 T	縄文、中世土師器	溝状遺構	93 T	珠洲	穴、溝状遺構、土坑
40 T	中世土師器	穴、溝状遺構(区画溝)、土坑	94 T		穴、土坑
41 T		穴、溝状遺構	95 T	中世土師器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(橋本川)
42 T	中世土師器	穴、溝状遺構	96 T	越中瀬戸、石臼	溝状遺構、井戸、河川跡 (橋本川)
43 T	中世土師器	溝状遺構	97 T	近世磁器	溝状遺構、土坑、河川跡(橋本川)
44 T		溝状遺構	98 T	唐津	穴、溝状遺構
45 T	縄文、珠洲、近世磁器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	99 T	中世土師器	溝状遺構
46 T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑	100 T	中世土師器	溝状遺構
47 T	中世土師器、近世陶磁器	穴、溝状遺構、土坑	101 T	中世土師器、珠洲、青磁	穴、溝状遺構
48 T	中世土師器、珠洲	溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	102 T		穴、溝状遺構
49 T	中世土師器 (集中的に多く出土)	穴、溝状遺構、土坑	103T		穴、溝状遺構
50 T		穴、溝状遺構	104 T	中世土師器	穴、溝状遺構
51 T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑	105 T	珠洲	川跡

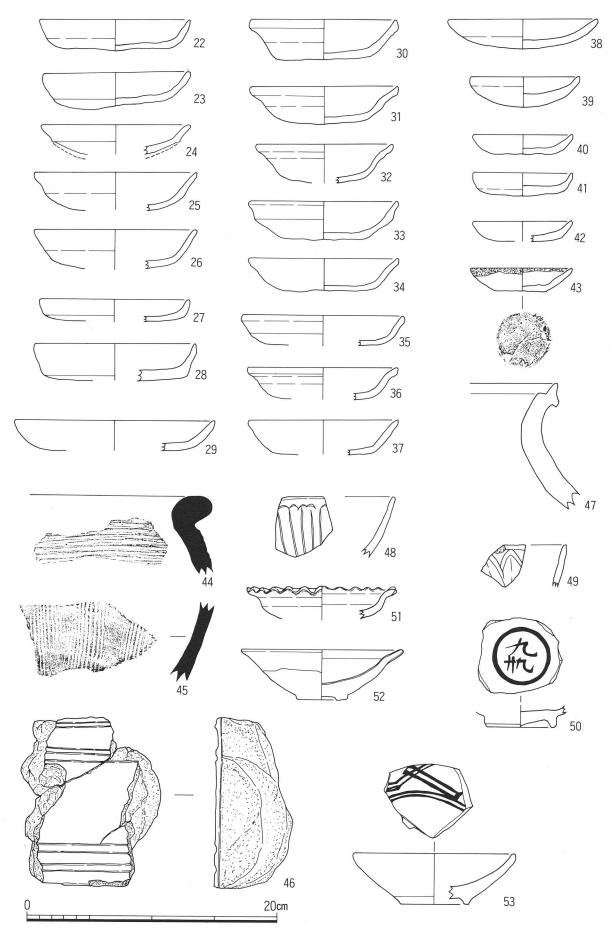
<sup>\*「</sup>穴」には、柱穴の可能性のあるものを含む。







第30図 梅原胡摩堂遺跡出土遺物実測図 (S = 1/3)



第31図 梅原胡摩堂遺跡及び梅原加賀坊遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)

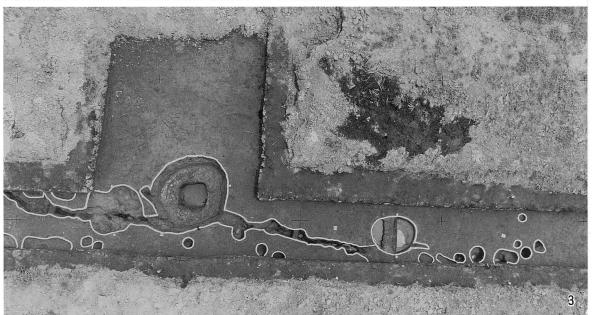
図版 1 6地区の遺構(1)



1.遺跡遠景(上空南から)



2.Y2列遠景(南から)



3. SE04·SK03·09付近 (上空から)

図版 2 6地区の遺構(2)

- 1. SE04· SK03·09付近 (南から)
- 2. SE04土層断面





- 3. SK05~07·10·11付近 (南から)
- 4. SK09を断割る地割れ





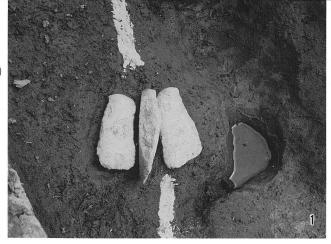
- 5.作業風景
- 6. SK05土層断面



7. SK05~07・10・11付近 (上空から)

図版3 6地区の遺構(3)

1.打製石斧出土状況 2. SD05(北から)









4. Y74列遠景 (上空西から)

5. P 1・2・4 付近 (東から) 6. X 3・4 列東側 (西から)

3. X 3・4 列遠景 (上空西から)













図版 4 6地区の遺構(4)

1.Y74列北側遠景 (上空南から)



2. SK01付近 (上空から)





3. SE03(北から)

4. SE01(南から)





5. SD08·09付近 (北から)

6. Y80列全景(南から)

図版5

7地区の遺構(1)



1.全景(東から)



2.建物群近景 (東から)





図版 6 7地区の遺構(2)

図版7 7地区の遺構(3)



1. SB02·03·05 (西から)



2. SD02·SX01 (北から)



3. SX02 (東から)



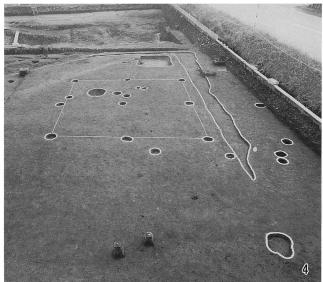


図版8 7地区の遺構(4)

1.調査風景

2.基本土層

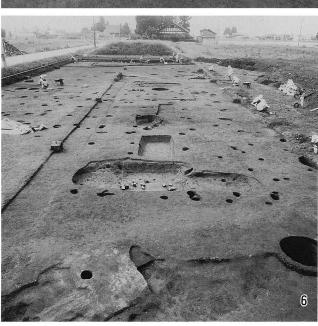




3. SD01(北から)

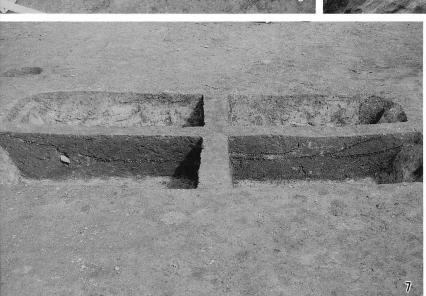
4. SB01(西から)





5. SE01(東から) 6. SK03・04・05

(東から)





7. SK04土層 (南から)

8. SK03·04·05 (西から)

図版 9 7地区の遺構(5)









4. SX01·02土層

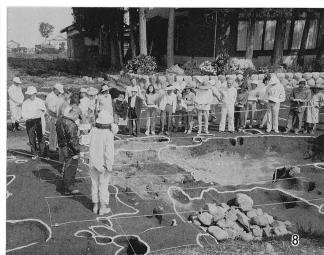
3. SX01 盛り砂断面



6

5. X 9 Y16 土器出土状况 '6. SX02下層集石





7. SB07 P 4 柱根痕跡

8. 見学会風景





図版10 7地区の遺構(6)

1. X22列(東から) 2. SB07(東から)



8地区の遺構

3. SD03付近 (上空東から)



5

4. SD03西溝土層

5. X12列(東から)





6. SD01付近(北から) 7. X48列(東から)

図版11 9地区の遺構(1)



1.全景(西から)



2.全景(東から)



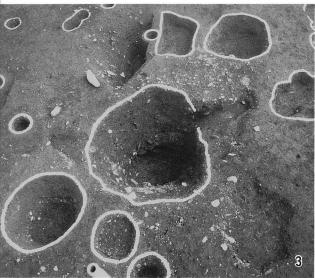
3. SI 01·SK01·02 (南から)

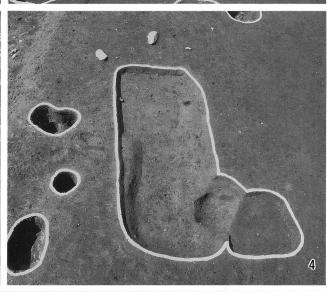




図版12 9地区の遺構

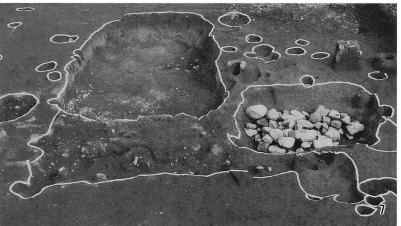
- 1.基本土層
- 2. SK03(南から)





- 3. SE01(南から)
- 4. SK07(東から)





- 5. SD01(南から)
- 6. SI 01カマド (東から)
- 7. SI 01・SK01・02 (西から)



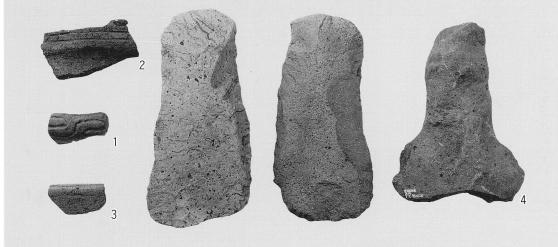




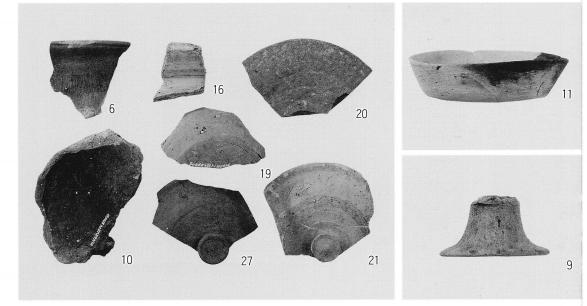


9. SK02内の石

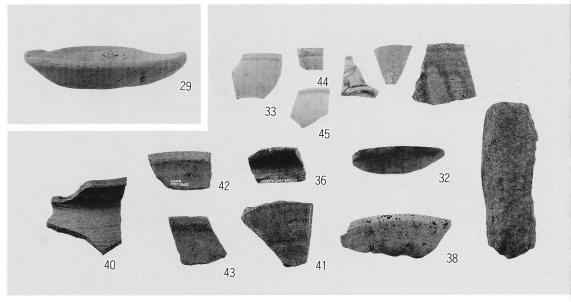
図版13 6地区の遺物 1:3



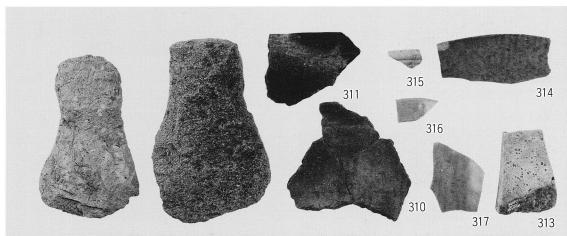
縄文土器・打製石斧



須恵器·土師器

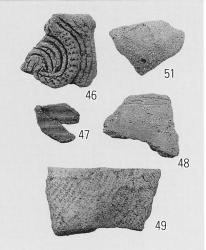


土師器・珠洲・白磁・青花 瀬戸・砥石



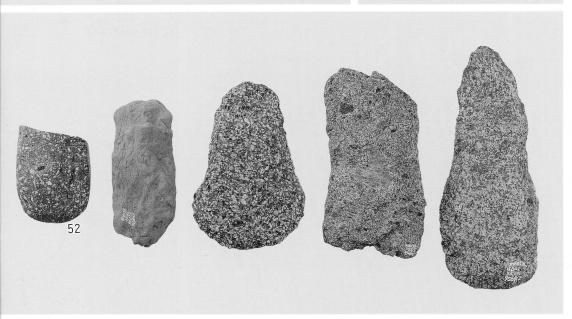
打製石斧·縄文土器 珠洲·白磁·青磁·砥石





図版14 7地区の遺物(1) 1:3

縄文土器



磨製石斧·打製石斧





須恵器(1・2)





116



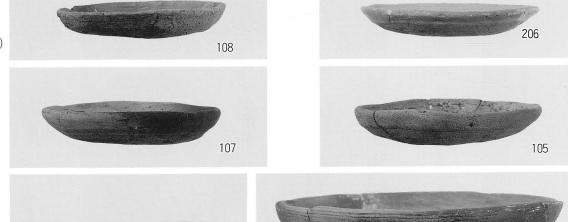


67

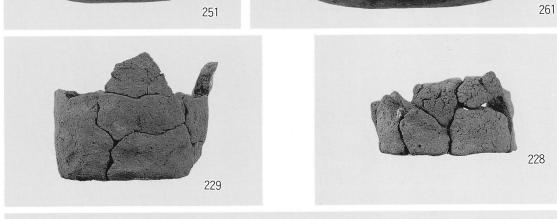


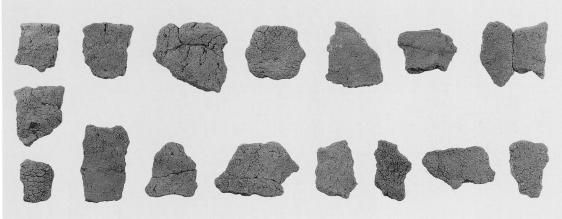
土師器(1・2)

図版15 7地区の遺物(2) (1:2)

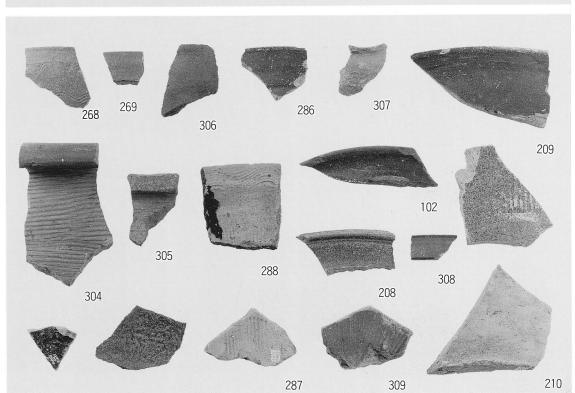


土師器

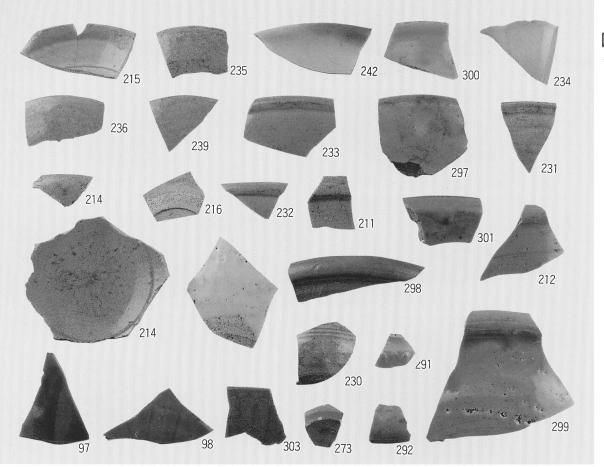




製塩土器



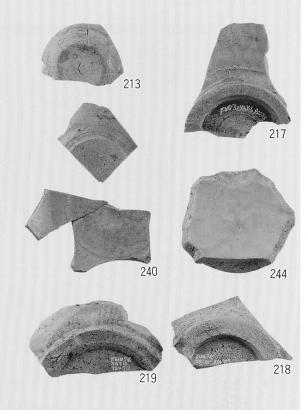
珠洲・常滑 漆付着土器・褐釉陶器 (1:3)



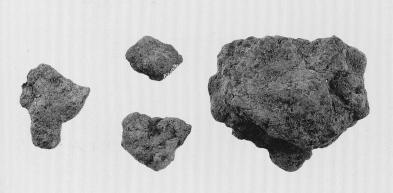
図版16 7地区の遺物(3) (1:2)

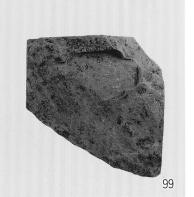
白磁





白磁



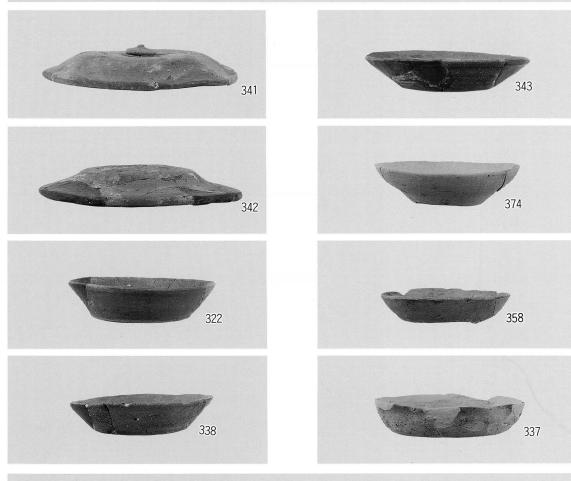


左:鉄滓 石:硯

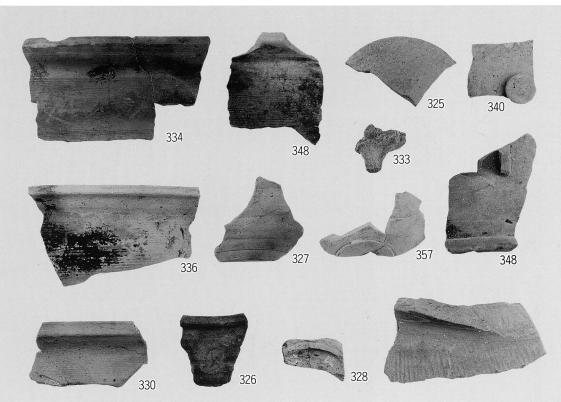
図版17 9地区の遺物(1) (1:3)

318 320

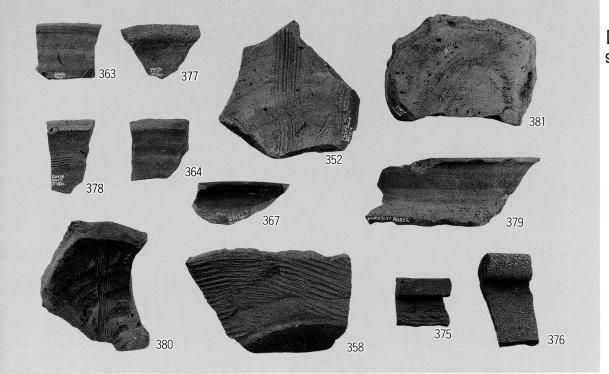
打製石斧·縄文土器



須恵器·土師器

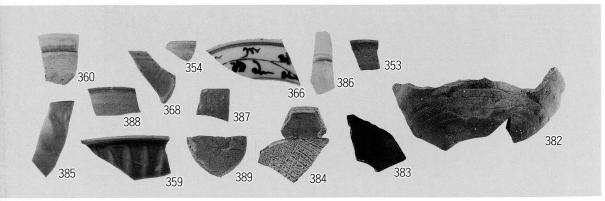


土師器·須恵器 製塩土器

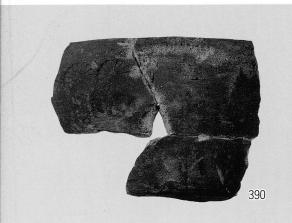


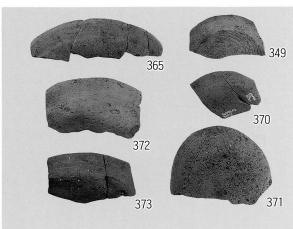
図版18 9地区の遺物(2) (1:3)

珠洲

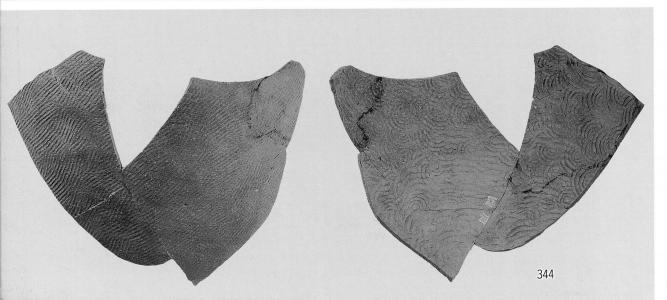


白磁·青磁·青花 瀬戸





左:瓦器 右:土師器



須恵器

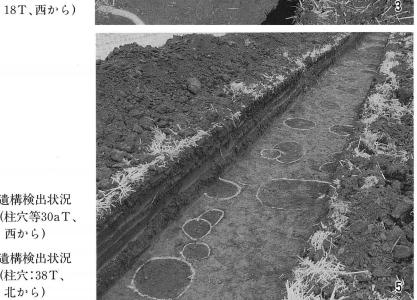
## 図版19

1.作業風景

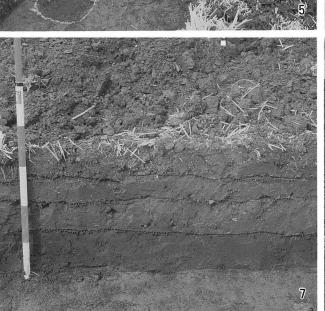
2.遺構検出状況 (掘立柱建物:

- 11T、東から) 3.遺構検出状況 (溝状遺構: 13T、西から) 4. 遺構検出状況









5.遺構検出状況 (柱穴等30aT、 西から)

(溝状遺構:

6.遺構検出状況 (柱穴:38丁、 北から)

- 7.基本層位 (39T、南から)
- 8.中世土師器集中 出土地点(東端) 49T、西から)





- 1.遺物出土状況 (鋳型:63T、 東から)
- 2.遺構検出状況 (柱穴、土坑: 65T、西から)





- 3.遺物出土状況 (土師器:65T、 北から)
- 4.遺構検出状況 (柱穴、溝状遺 構:66T、 西から)





- 5.遺構検出状況 (柱穴、土坑等: 83T、西から)
- 6.遺構検出状況 (礎石:91T、 南から)





- 7.遺構検出状況 (礎石:91T 南拡張区、 南から)
- 8.遺構検出状況 (土坑・旧橋本 川等:97T、 西から)

図版21 試掘調査出土遺物(1)







中世土師器 (1:2)





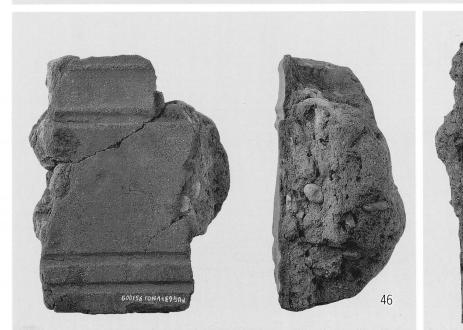
右:土師器甕 (1:3) 右:土師器鍋 (1:3)



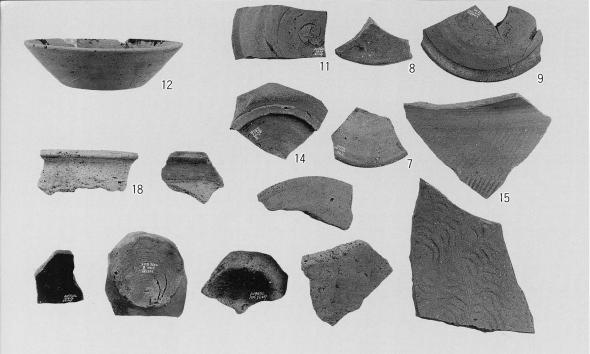


24 24 42 28 29 29

縄文土器、中世土師器、 打製石斧、砥石、羽口 (1:3)



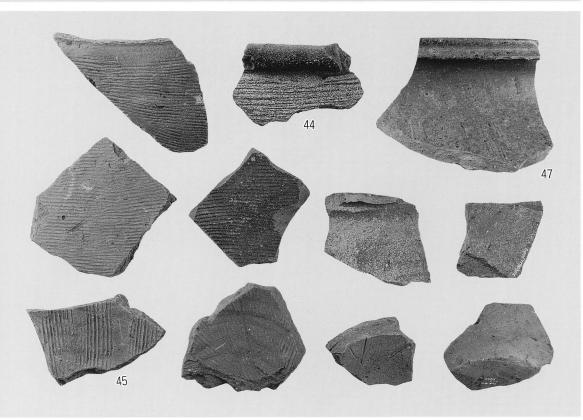
左:鋳型(1:2) 右:鉄製品(1:2)



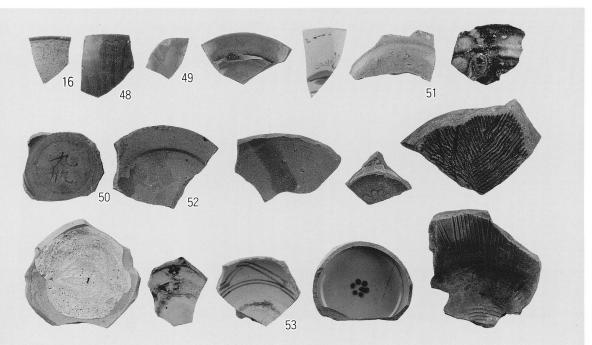
図版22

試掘調査出土遺物(2)





珠洲ほか (1:3)



灰釉陶器、青磁、瀬戸 美濃、越中瀬戸、唐津、 伊万里 (1:3)

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちうめはらおとしどいせきぐん												
書名	富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅲ												
副書名	県営低コスト化水田農業ほ場整備事業(梅原地区)に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(6)												
編著者名	久々忠義、佐藤聖子												
編集機関	編 集 機 関 富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター												
所 在 地 〒930-01 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TLL (0763)52-1111													
<b>発行年月日</b> 西暦 1996年 3 月31日													
ふりがな 所収遺跡名	, ,,	な	ー ド 遺跡番号	北 緯。//	東経。/ //	調査期間	調査面積 (対象) ㎡	調査原因					
<b>海</b> 朦 藷 芦	室前果福光町格	<b>韓原</b> 16421	177	36度 33分 35秒	136度 54分 15秒	19950619 ~ 19951018	3,235 m²	県営ほ場 整備事業					
所収遺跡名	種 別 🗈	主な時代	主な遺	貴構	主	な遺物	特	記事項					
梅原落戸	奈	奈良・平安 寺代、中世	井戸、掘立柱建物 竪穴住居跡、竪穴 溝、穴、集石遺植 川跡、柱穴		縄文土器、石器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、常滑、越前、瀬戸・美濃、青磁、白磁、青花、製塩土器、火鉢、鉄滓、羽口、低石、硯、宋銭、炭化米、種子、陶磁器		落跡を多	古代末〜中世初期の集 落跡を発見した。					

県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業 (梅原地区) に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(6)

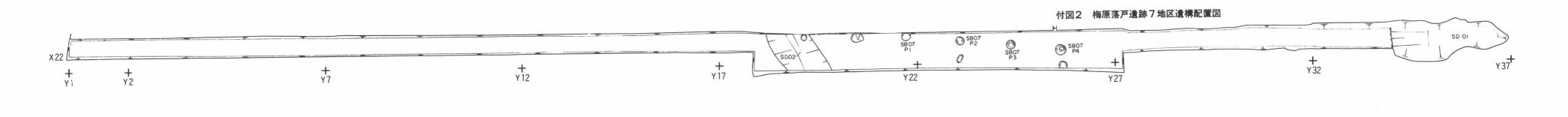
## 富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅲ

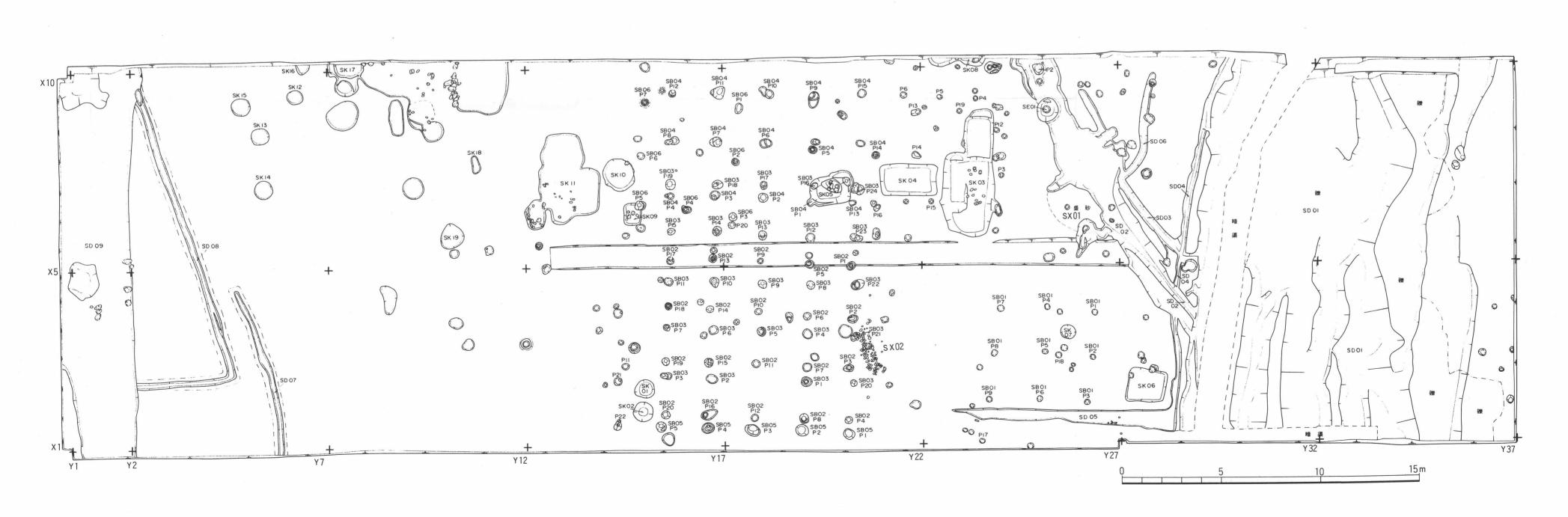
平成8年3月29日

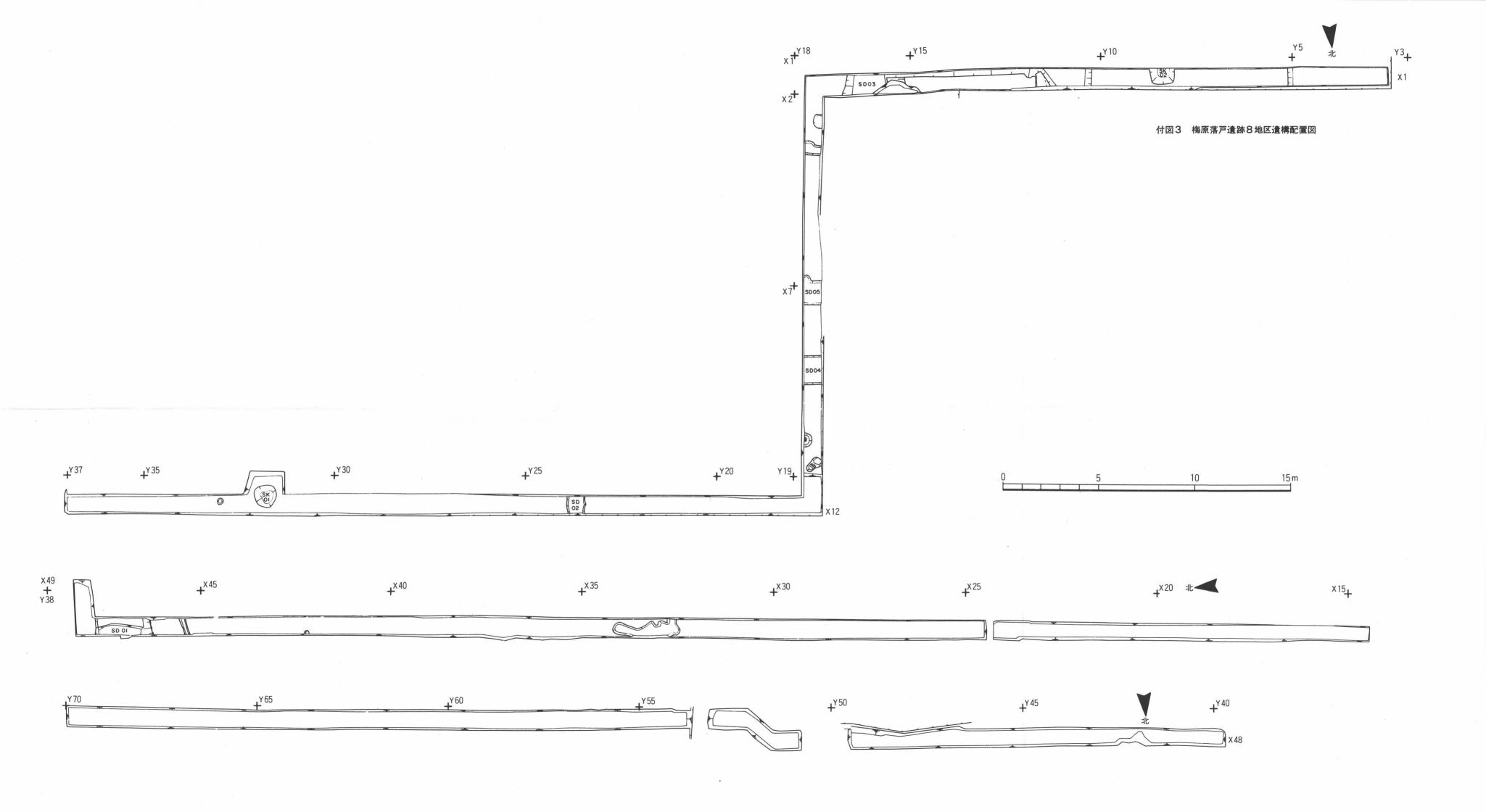
編 集 福光町教育委員会 富山県埋蔵文化財センター

発 行 福光町教育委員会

印 刷 日興印刷株式会社







付図4 梅原落戸遺跡9地区遺構配置図





